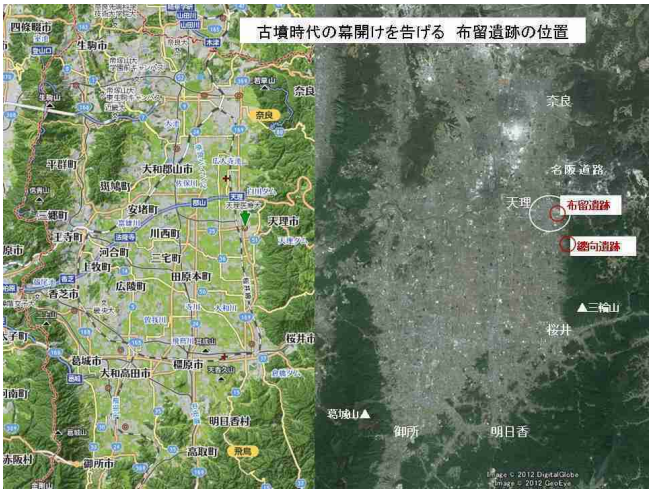
5. ヤマト王権を支えた物部氏の本拠地「布留遺跡」再訪 Walk　2012. 5. 19.

今まで　布留遺跡に抱いていたのイメージが随分　変わりました

天理参考館「大布留展」関連会　関川尚功氏「ヤマト政権の生産体制を探る」の聴講



1.　初期大和王権を支えた物部氏の本拠地「布留遺跡」　概　要

検出された遺構と出土遺物から　見えてくる遺跡の姿を知る

天理参考館　「大布留遺跡展　–物部氏の拠点集落を掘る–」図録の再整理

1.1.　布留式土器の出土と祭祀の場　　祭祀の役割を重要任務としていた物部氏

【参考】土器編年と布留式土器

1.2.　物部氏の武具　武器製造を推測させる三島里中地区から出土した大量の把装具類

1.3.　物部氏の居館と物部氏が営んでいた玉作り・鉄器生産工房

布留遺跡　物部氏の中枢　杣之内（樋ノ下・ドウドウ地区　&　アゼクラ地区）　そして　三島地区

1.4.　物部氏の武具　武器製造を推測させる三島里中地区から出土した大量の把装具類

1.5.　渡来人と工人集団　【1】　韓式系土器などの遺物の出土

1.6.　　渡来人と工人集団　【2】　渡来工人の群集墓　赤坂古墳群

2.　随分印象が変った私の「布留遺跡」観　大布留展　&　関連講演会に参加して

鍛冶工房だけではない遺跡の姿も見えてきました

2.1.　　抱いてきた布留遺跡のイメージ　「ヤマト王権の鉄器生産工房」

狭山博物館　平成19年特別展「国土を拓いた金物たち」図録より

2.2.　随分印象が変った私の「布留遺跡」観　大布留展　&　関連講演会に参加して

3.　物部氏の本拠　天理市布留遺跡　再訪　再訪 Walk　　2012.5.19.

遺構・遺物の出た場所を意識して　布留遺跡を歩く

3.1.　天理教　神殿ほか　天理教本部　（布留遺跡三島調査地区）から丘の上　布留の十字路へ

3.2.　布留川の扇状地への流れ出口　「布留」交差点　周辺

3.3.　布留の十字路から天理大学キャンバス・天理参考館へ　布留川南岸の杣之内地区

物部氏の布留川対岸の本拠地　生産工房や居館が立ち並び、大溝が開削されていた杣之内地区

3.4.　午後　再度　布留の丘から石上神宮へ

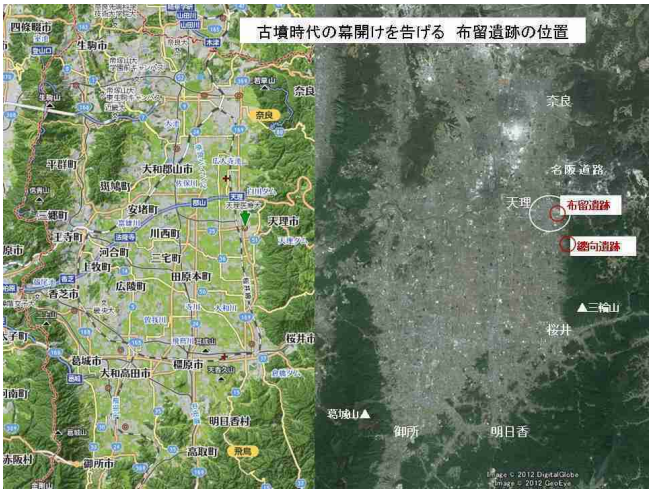
参考　1.　　布留遺跡から出土した遺構・遺物の一覧

参考　2.　〔和鉄の道〕　石上神宮の国宝「七支刀」の復元展にあわせて　　物部氏の本拠 地　布留を訪ねる　2006.3.

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/6iron05.pdf

ヤマト王権を支えた物部氏の本拠地「布留遺跡」再訪 Walk　2012. 5. 19.

天理参考館「大布留展」関連会　関川尚功氏「ヤマト政権の生産体制を探る」の聴講



5 月 19 日（土）天理大学付属天理参考館で開催中の「大布留遺跡展-物部氏の拠点集落を掘る-」に合わせて開催された関連講演会 関川尚功氏「ヤマト政権の生産体制を探る-渡来系工人と玉造集団から見た布留遺跡」を聴講を機会に今は天理教の神殿をはじめ、天理教本部の諸施設や天理大学が立ち並ぶ「布留遺跡の天理市布留」界隈を再訪 Walk しました。

ヤマト王権の軍事部門を担い、兵器庫である石上神宮の祭祀を司り、ヤマト王権の中枢に君臨した物部氏の本拠。

物部氏が居館を構え、多くの渡来工人を集め、「鉄器」や「玉作り」などの生産工房をこの布留で営んでいた。

大和王権にかかわる豪族たちが　国づくりに不可欠な鉄器生産工房を経営し、勢力を伸ばしてゆく。

古墳時代　ヤマトで営まれた有力豪族たちの鉄器工房群のひとつ物部氏の「布留」。

古墳時代の様相を明らかにする遺構や遺物が多数出土し、弥生時代から大和王権確立の過程を知る重要な遺跡である。

天理市布留には何度かでかけましたが、「布留遺跡」の正確な遺構や遺物の出土位置もよく知らず、出土遺物も垣間見る程度。本で読んだり、話を聞いたりの知識で、私が作り上げた布留遺跡のイメージです。

「邪馬台国から初期ヤマト王権へ　日本誕生に重要な役割を果たした鉄」とよく言われるのですが、この時代の鍛冶工房遺跡の遺構・遺物は限られていて　なかなか　その鉄の実像が見えてこない。

「古墳時代の幕開けを作った大和の鉄」の位置づけが　いつも自分の頭の中でしっくり行かない。

本年５月　天理参考館で「大布留遺跡展」、橿原の橿考研博物館では「三国志の時代　２・３世紀の東アジア展」が開催中でそれぞれ「古墳時代の鉄」・「朝鮮半島との交流」の関連講演会が開催されるのを知って、初期ヤマト王権を支えた物部氏の鉄器生産工房や朝鮮半島交流など新しい知見を得る絶好の機会と。

布留遺跡の位置は現在天理教本部の諸施設が建つ敷地全体とは聞き、遺跡の位置づけや解析の図は幾度も目にしましたが、遺跡全体を捉える遺跡展はみたことがなく、楽しみで出かけました。

でも今回布留へ出かけて、布留遺跡の鍛冶工房ののイメージが随分違っていたのにはびっくり出した。

◎　この時代の大和の鉄器工房はもっと先進的がと思いましたが、それはもっと先の時代のようです。

◎　また、今回　google の衛星写真を使って　布留周辺の地理的位置を調べましたが、布留遺跡のある天理の位置が、奈良盆地の中で随分面白い位置にあり、遺跡中央を流れくだる布留川が、今とは違って　氾濫をくりかえす暴れ川であったろうことも。

本当に面白い布留再訪。ちょっと頭の整理はできましたが、新たな疑問も・・・・・

皆さんには　どのように　映るでしょうか　　ちょっと長い資料になりましたが、図・写真が主ですので、お許しください。

2012 年　6 月　久し振りの布留遺跡をせいりしつつ　　by Mutsu Nakanishi

ここ数年の邪馬台国大和説が大ブーム。朝鮮半島の鉄素材が邪馬台国を考えるキーワードのように言われてきましたが、どうも　その反省期。

本年関西で開催されている「大布留展」や橿原考古学研究所「三国志の時代　-2･3 世紀の東アジア-　」展などを見る限り、そんな気がします。

下記　昨年 11 月　の記事ですが、インターネットに　面白い記事があったので　参考まで

【参考】 朝日新聞ディジタル　「鉄を制するものは倭国を制す」i http://digital.asahi.com/articles/SEB201111150016.html

1.　初期大和王権を支えた物部氏の本拠地　「布留遺跡」概　要
検出された遺構と出土遺物から見えてくる遺跡の姿を知る

天理参考館　「大布留遺跡展　−物部氏の拠点集落を掘る−」図録の再整理

布留遺跡杣之内(樋ノ下・ドウドウ)地区の大型掘立柱建物群と『日本書紀』履中天皇条の「石上溝(いそのかみのうなで)」と推定される大溝(5〜6世紀)　左上の溝ぞいに密接して16棟の生産工房と見られる竪穴建物群
手前　右に6世紀に大溝につながる溝2
大型掘立柱建物群　居館と関連する倉庫
竪穴建物群　生産工房（鍛冶・玉作り工房）と見られる

アゼクラ地区　居館と居館を囲む護岸石敷遺構　　祭祀の場と出土埴輪　　生産工房跡(竪穴住居群)と出土した鍛冶遺物

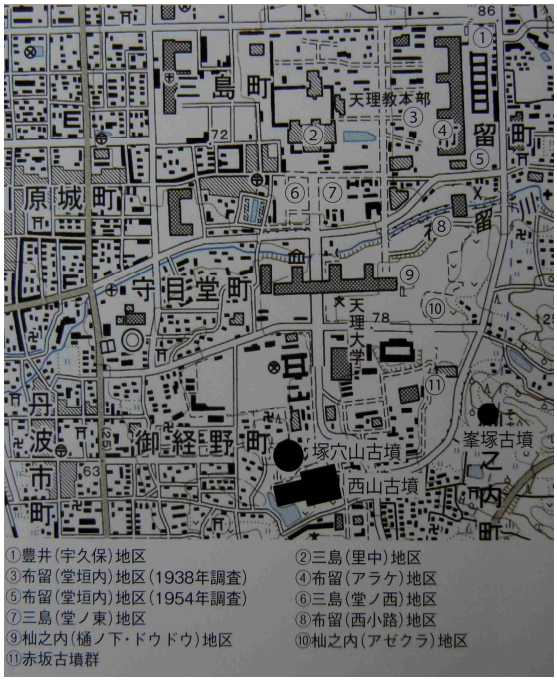
奈良盆地東縁部に位置する旧石器時代から現在まで続く複合遺跡布留遺跡のある「天理市布留」は南北に長く伸びる奈良盆地の東縁中央部山麓から流れ出る布留川の扇状地にある遺跡で　奈良から飛鳥へ南北に結ぶ山辺の道の中間点にあり、また、東西には現在も名阪国道が山を越えて行く、東国（伊勢−東海）・西国（河内・瀬戸内）と大和を結ぶ交通の結節点として重要な地点にあたる。　また、この布留の地は　初期ヤマト王権の王城の地に隣接する北の守りの位置に当たる。

布留遺跡は石上神宮の山裾から西へ布留川が流れ下る傾斜地「布留」の地にあり、この布留川をはさんで　北側に神殿ほか天理教本部の諸施設　南側に天理大学がある広大な地域が布留遺跡で、古墳時代 大和王権を支えた物部氏の集落の数々の重要な遺構や遺物等がこの地域の下にそっくりそのまま埋まっている。

本や資料で何度もそれらを眼にする機会がありましたが、それが地図上のどの位置に当たり、また　遺跡全体として遺構・遺物を眺めたことはなし。　また　一番の興味である鍛冶遺構や遺物について、眼に触れた程度で、中身を検討したことはなし。

今回大布留伝へ行って、初めて　それらを確認することができました。

今回大布留展で知ったことも含め、「布留遺跡の顔」をまとめると次のとおりである。



布留遺跡　発掘調査区域

◎　古墳時代前期を代表する土器の形式「布留式土器」は　1938 年はじめて布留遺跡調査がおこなわれた時に出土した土器につけられた名称で、弥生時代から古墳時代への移行期計測の基準土器として編年の重要な土器である。

◎　また　布留遺跡は初期大和王権の軍事を担った物部氏が本拠を置いた集落遺跡で、古墳時代中期の 5 世紀には、布留川南岸地域に豪族の居館や大型倉庫が建てられ、また、日本書紀に記されている「石上溝」と推定される大溝が出土している。

◎　この布留遺跡の東側には物部氏が古くから祭祀をつかさどってきた石上神宮が鎮座し、大量の武器が納められ、大和王権の武器庫としての役割を担ってきた。

◎　布留遺跡の布留（堂垣内）地区では石敷に多数の土器や滑石製模造品を伴った祭祀の場や祭場を画するために使用されたと見られる特異な円筒埴輪群が発見されている。
また、祭りにかかわる多量の高杯群が投棄された場所も 1955 年に調査されている。

◎　さらに　玉工房や武器工房との関連を示す遺物や渡来人とのかかわりを示す遺物も多数出土している。

大布留遺跡展　−物部氏の拠点集落を掘る−」ではこの布留遺跡より出土した数々の資料から物部氏の実態に迫る。

天理参考館　ニュースレター NO.12 より引用整理

物部氏の根拠地　布留遺跡から検出した主要遺構・遺物

「大布留遺跡展　」図録より整理

① 豊井（宇久保地区） 1984 年調査	埴輪群が発見された布留（アケラ）地点から北東 300m 古墳時代の掘建柱建物・井戸・土器溜まり遺構　と　中世の濠出土 土師器高杯（60 以上）・壺・甕・須恵器甕・滑石製模造品（勾玉・管玉・剣型石製品・有孔円板・白玉）・鉄鏃などミニチュア農工具
② 三島（里中地区）	布留川分流の流路が変わる氾濫原で古墳時代の井戸以外に遺構検出されず 古墳時代の流路から　土師器・須恵器・木器などが大量に出土。 特に 5〜6 世紀の木製刀剣装具類（把装具・鞘）が出土 流路からは大量の鉄滓・砥石が出土　付近に大掛かりな武器工房があったと見られる
③ 布留（堂垣内　地区）【1】 1938 年調査	A・B・C3 地点から　祭祀にかかわると考えられる石敷遺構（住居跡を囲むと推定）検出。 この敷石に集中して土器類（土師器甕・壺高杯・小型丸底壺）　出土 A 地点の敷石遺構から滑石製模造品の玉類・櫛出土
④ 布留（アラケ）地区 1995 年調査	1938 年調査された地区から東に約 60m の地点　北西から南東に幅 04〜0.7m の石列が約 7m 以上のび、　埴輪がその北側から、破片となって出土。（復元作業で円筒埴輪 10 朝顔形埴輪　15〜16 固体　巴形や半円形四角形、三角形などの透孔がある特異な計状。祭祀の場で使われたものが破棄されたと推定されている）
⑤ 布留（堂垣内地区）【2】 1954 年調査	1938 年調査地点より東南 150m　5 世紀の石敷遺構を検出 土器片に混じって剣型石製品・有孔円板・勾玉・管玉・白玉・など数千点に及ぶ滑石製模造品・ガラス製小玉・碧玉製管玉が出土
⑥ 三島　（堂の西地区） ⑦ 三島　（堂の東地区）	5〜6 世紀　玉未成品・石核・剥片が出土
⑧ 布留　（西小路地区） 1976〜1977 年調査	布留川南岸に位置する地区で　5 世紀を中心とする柱穴・土坑・溝を検出 下記に示す出土品が示す通り　祭祀に関係した遺構が集中している場所とみられる 各種の須恵器や土師器のほか、製塩土器、有孔円板、管玉、白玉、ガラス玉が出土 土坑（LN22）　内には倒立した土師器甕が置かれ、横から緑泥製の剣形石製品が出土 土坑（LN99）　内部には灰と炭化物が厚く堆積していたが、底や壁に焼けた跡なく、ここからは各種須恵器・土師器のほか　製塩土器・緑泥石製有孔円板・管玉・100 点を超える白玉・ガラス玉・土玉が出土 土坑（LN100）　ここからは U 字型鉄製鋤先・土師器杯・高杯・ミニチュア壺などのほか緑泥石製有孔円板が出土
⑨ 杣之内 （樋ノ下・ドウドウ地区） ⑩ 杣之内（アゼクラ地区）	布留川南岸沿いの石神神宮から西 400m 地点が杣之内（アゼクラ）地区 豪族の居館に関わると見られる石敷遺構を検出 さらに北西に 100m の杣之内（樋の下・ドウドウ）地区でも、大型の掘立柱建物跡や大溝が見つかっている。　この溝は『日本書紀』に記された「石上溝」にあたると推測されている。 この大溝からは須恵器や土師器など多数の土器とともに、鍛冶関連の遺物や滑石製模造品の祭祀遺物、馬歯、馬骨が出土。 また、大溝に面した北西部と南東部に多くの掘立柱建物跡や竪穴建物群が見つかった。 その建物跡から鉄鉗や鉄滓、ふいご羽口破片らが出土 この付近が玉作り、ガラス・鍛冶工房だったことが分かる。 これら検出された居館にかかわる遺構や大型建物群遺構そして生産工房遺構そして大溝の開削などから、この地域が物部氏の本拠地　布留遺跡の中枢部と見られる
⑪ 赤坂古墳群	布留遺跡の豪族居館や大型倉庫のある丘陵の南 150m　谷を隔てた丘陵に 5〜7 世紀にかけての小規模な 20 基ほどの古墳群で、鍛冶工人が築いた群集墳 赤坂 17 号・18 号の間の周溝から鞴羽口や鉄塊・鉄滓　赤坂 2 号・4 号・6 号・9 号墳から鉄滓
渡来系遺物の出土	出土また、赤坂 14 号墳殷出土した韓式甕から　被葬者は百済系渡来人と推察されている。 赤坂古墳群のほかにも　布留遺跡からは、5 世紀の韓式系土器など　渡来人との関わりを示す遺物が数多く出土し、数多くの渡来系集団が布留遺跡にいたと見られている。

1.1. 布留式土器の出土と祭祀の場　　祭祀の役割を重要任務としていた物部氏

布留遺跡最初の学術調査が行われたのは　現在　天理教の大神殿の東側　広場をはさんで　南北に長い建つ天理教本部建物の前のあたりか??　布留（堂垣内）地区。

　天理高等女学校のプール建設に際して　偶然　遺跡の存在が注意され、1938 年に末永雅雄・小林行雄・中村春寿氏等によって発掘調査がおこなわれた。

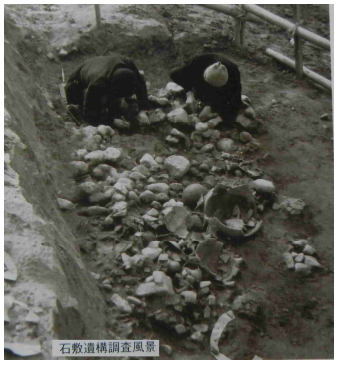
この調査で　A・B・C の 3 地点で　石敷遺構が検出され、住居跡であると指摘された。注目すべきはこの石敷遺構の上に木炭片を含んだ黒土層や灰層が認められ、これらの敷石から土師器の甕・壺・高坏・小型丸底壺が大量に出土し、須恵器も少しあった。また、A 地点の敷石から滑石製模造品と呼ばれる玉類や櫛出土し、後の調査でこれらの敷石は祭祀にかかわるものとされた。

（大布留展図録より）

1938 年調査で堂垣内地区からの出土遺物

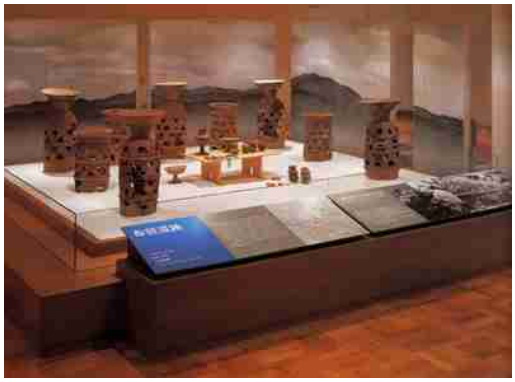
出土した土器の一群は、当時知られていた土師器の中でも古い様相を呈していたため、「布留式土器」と命名されたが、今日、近畿地方の古墳時代前期を代表する土器とされ、この時代の古墳や遺跡の築造時期を推定する基準になっている。また、これら布留式土器と呼ばれる土器類は布留遺跡のあちこちの場所から出土している。

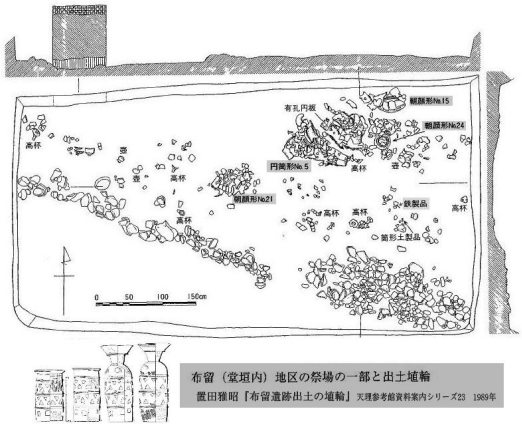
　また、1954 年にはこの調査地点から南東に 150m はなれた地点で　5 世紀の石敷遺構が検出され、多数の土師器の壺や高杯のほか、土器片に混じって剣型石製品・有孔円板・勾玉・管玉・白玉・など数千点に及ぶ滑石製模造品・ガラス製小玉・碧玉製管玉が出土している。



1954 年調査　堂垣内地区の石敷遺構調査風景と堂垣内地区からの出土品

上記の堂垣内地区の地点から東に約 60m の地点堂垣内　アラケ地区　現在の天理教本部の大きな建物の南端近傍??
で北西から南東　に
幅 04～0.7m の石列が　約 7m 以上のび、埴輪がその北側から、破片となって出土し、祭祀の場で使われたものが破棄されたと推定されている。

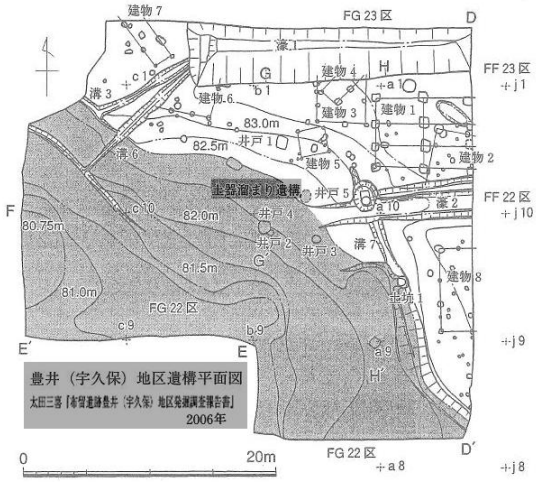




祭りの場（天理考古館展示）と アラケ地区から1995年検出された祭りの場の一部

（復元作業で　円筒埴輪 10　朝顔形埴輪　15～16 固体　巴形や半円形四角形、三角形などの透孔がある特異な計状。）

さらに　埴輪群が発見された布留（アケラ）地点から北東 300m　現在の布留の十字路の南西側の角周辺の豊井（宇久保）地区からは1984年の調査で古墳時代の掘建柱建物・井戸・土器溜まり遺構のほか中世の濠が出土した。この土器溜まりからは　土師器高杯（60　以上）・壷・甕・須恵器甕・滑石製模造品（勾玉・管玉・剣型石製品・有孔円板・白玉）・鉄鎌などミニチュア農工具が出土。この「土器溜まり遺構」は自然河道の北岸にあり、遺物の出土状況から、北の側の高い位置から一括投棄されたものと考えられている。



豊井（宇久保）地区出土遺物

布留川の南岸に沿って建つ天理大学の建物北端のすぐ北東側広場の布留川南岸の地点　布留西小路地区からも 5 世紀を中心とする柱穴・土坑・溝を検出。 そこは祭祀に関係した遺構が集中している場所とみられ　、各種の須恵器や土師器のほか、製塩土器、有孔円板、管玉、臼玉、ガラス玉が出土した。 また、渡来人の祭祀へのかかわりを示す　韓式土器や U 字の鉄製鎌先出土している

特に　土坑（LN22）　内には倒立した土師器甕が置かれ、横から緑泥製の剣形石製品が出土

土坑（LN99）　内部には灰と炭化物が厚く堆積していたが、底や壁に焼けた跡なく、ここからは各種須恵器・土師器のほか製塩土器・緑泥石製有孔円板・管玉・100 点を超える白玉・ガラス玉・土玉が出土

土坑（LN100）からは U 字型鉄製鋤先・土師器杯・高杯・ミニチュア壷などのほか緑泥石製有孔円板が出土

これらのほか　渡来人の祭祀へのかかわりを示す　韓式土器や U 字の鉄製鎌先出土している

布留西小路地区の土坑から出土した 5 世紀を中心とした祭祀系遺物　　渡来人の関係を示す韓式土器も出土

上記したごとく、物部氏の本拠地　布留遺跡から　これら数々の祭祀石敷遺構や大量の遺物が出土しており、石上神宮の祭祀をつかさどっていた物部氏の重要な任務としての祭祀の一端をうかがい知れる。

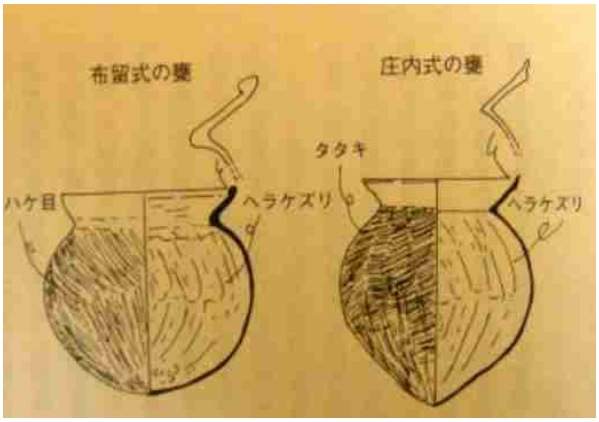
【参考】　土器編年と布留式土器

異なる場所での事象を統一的に年代を知ることは極めて重要ですが、文字がない時代の年代を知ることはきわめて難しい。

日本では　遺跡から出土した土器の種類を細かく分類し、新旧の順に並べること「土器編年」により、年代を知ることがおこなわれてきました。しかし、土器編年からわかるのは、土器を古い順番に並べることであって、年表にして何年ごろかという具体的な年代ではありません。つまり、相対的な年代であって、絶対年代ではない。

たとえば、土器のタイプから紀元前３５年とか、紀元後１００年というような具体的な年代は絶対に出てきません。

ある土器が弥生中期後半のものであることはわかっても、いったい何年から何年ごろまで使われたか、ということは厳密にはわかりません。



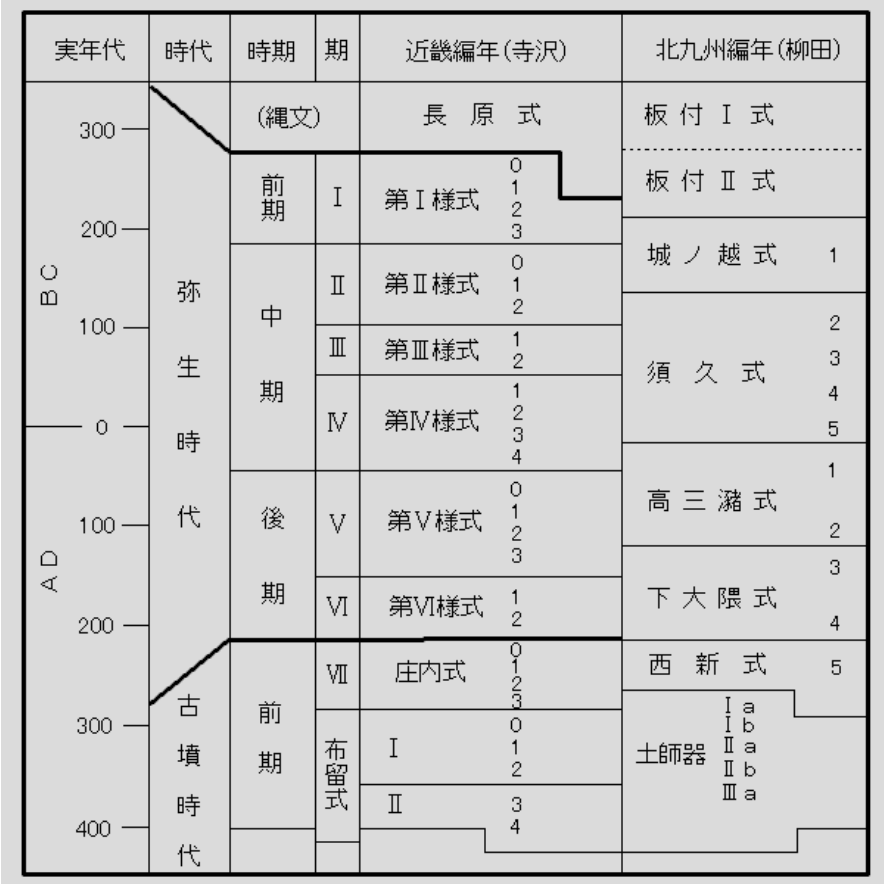
布留式土器と庄内式土器の特徴模式図

　あえて年代をつけるには、土器と一緒に出土する遺物などによって、おおよその年代を推定するだけです。

たとえば、土器と一緒に作られた時代がはっきりしている中国の鏡や貨幣が出土した場合は、年代を知る有力な手がかりとなる。多くのデータをそろえ、比較検討して初めて、ある程度正確な年代が推定できる。

もっと確実に年代を知る方法として登場したのが、年輪年代法やC12加速器　分析法などの手法で、現在では　これらの長所・欠点を補い合いながら年代が検討されている。

【畿内・大和の土器編年　年代対照表の一例】



実年代	時代	時期	期	近畿編年(寺沢)	北九州編年(柳田)
BC 300	弥生時代	(縄文)		長原式	板付Ⅰ式
		前期	Ⅰ	第Ⅰ様式 0 1 2 3	板付Ⅱ式
BC 200		中期	Ⅱ	第Ⅱ様式 0 1 2	城ノ越式 1
BC 100			Ⅲ	第Ⅲ様式 1 2	須久式 2 3 4 5
			Ⅳ	第Ⅳ様式 1 2 3 4	
BC 0		後期	Ⅴ	第Ⅴ様式 0 1 2 3	高三潴式 1 2
AD 100			Ⅵ	第Ⅵ様式 1 2	下大隈式 3 4
AD 200	古墳時代	前期	Ⅶ	庄内式 0 1 2 3	西新式 5
AD 300			布留式	Ⅰ 0 1 2	土師器 Ⅰa Ⅰb Ⅱa Ⅱb Ⅲa
AD 400				Ⅱ 3 4	

右図は弥生時代から古墳時代前期の土器編年表の一例を示しています。

弥生時代から古墳時代へ　東アジア情勢の変化と呼応しつつ日本が　倭国・邪馬台国から初期大和王権へと大きく変貌してゆく時代を系統的に捉えるための尺度として　土器編年が果たしてきた役割は大きい。

特に　近畿の庄内式土器・布留式土器の出土は古墳時代の幕開けを告げる土器として極めて重要な土器である。

　この土器編年の基準時になってゆく布留式土器が始めて出土したのが、この布留である。この地で最初に作られたわけではありませんが、古庄内式土器とともに墳時代の始まりに使われた土器の名称として、全国で使われています。

これら庄内式土器も布留式土器もいずれも古墳時代に使われた素焼き無紋　８５０℃前後の酸化炎で焼かれ、赤褐色の土器で、布留式は底が丸く外面にハケ目模様があり、庄内式はややとがっていてタタキ技法というものが使われている。内側はどちらも薄く削ってあり、驚くほど薄いものもある。

庄内式土器が３世紀前半から現れ、布留式土器がその後に続いた。

なお、縄文・弥生土器には地域性が強いのに対し、土師器では、同じような意匠・技法による土器が本州から九州までの規模で分布。これは、前代と一線を画すような文化交流の増大を意味し、その裏に政治的統一の進展を見る説が有力である。

1.2.　物部氏の武具　武器製造を推測させる三島里中地区から出土した大量の把装具類

現在　天理教の大神殿が建つ三島（里中）地区は布留川から分流した流路が何時期にも渡って流を変えて堆積した氾濫原。

このため、古墳時代の**井戸**以外に遺構検出されなかったが、古墳時代前期から後期にいたる多くの流路から　土師器・須恵器・木器などが大量出土し、近辺に活発な生活の場があったと見られている。

特に注目されるのは 5～6 世紀の木製刀剣装具類（把装具・鞘）の出土。 総数61点にものぼる全国一の出土量は物部氏が初期ヤマト王権の軍事部門を握り、大きな勢力を誇っていたことを示す例証だろう。

また、これらの木製刀剣装具類の出土には数多くの未成品も混在しており、また流路からは多量の鉄滓や砥石も出土していることから、刀や剣などの武器類をつくる大掛かりな武器工房がこの近辺に討ったことを推測させるものとして重要である。

14 木製漆塗り把縁　5～6世紀　右の把縁の高さ11.6cm

木製把・鞘出土状況

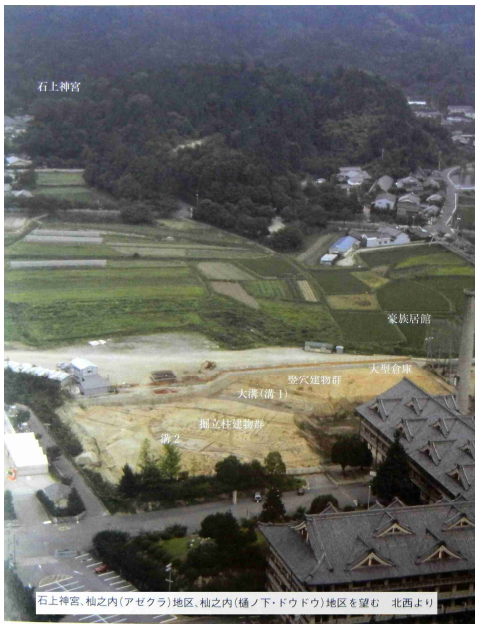
15 三島（里中）地区出土木製把　5～6世紀　中央一木づくりの把の長さ14.2cm

16 三島（里中）地区出土木製鞘・鞘装具　5～6世紀　右端の鞘の長さ40.9cm

布留遺跡　5～6 世紀　三島里中地区出土　左　把装具類　　右　鞘　装具

1.3.　物部氏の居館と物部氏が営んでいた玉作り・鉄器生産工房

布留遺跡　物部氏の中枢　杣之内　（樋ノ下・ドウドウ地区 ＆　アゼクラ地区）　そして　三島地区



石上神宮、杣之内（アゼクラ）地区、杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区を望む　北西より

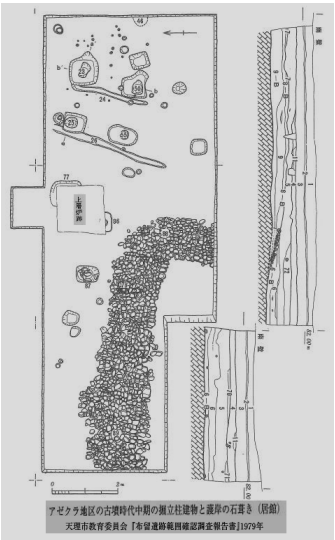
杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区の全景

布留川沿いの天理大学の建物の北端から北側には広い駐車場が広がっており、その奥 400m ほどの山裾には　緑に包まれた石上神宮の丘が見えている。　この広い駐車場の際　天理大学の建物に接するところが、樋ノ下・ドウドウ地区で　さらにこの地区に隣接して南東側　駐車場の南側の畑周辺がアゼクラ地区である。

この杣之内アゼクラ地区からは豪族の居館に関わると見られる石敷遺構を検出。　そして、さらに北西に 100m の杣之内（樋の下・ドウドウ）地区では中央に布留川から引水するための大溝が開削され、この溝の両側に面した北西部と南東部に多くの大型掘立柱建物や生産工房が林立することから、布留遺跡　物部氏の中枢だったと考えられている。

杣之内アゼクラ地区から検出された豪族の居館に関わると見られる石敷遺構周辺は　規模は不明であるが、掘建柱建物2棟以上とその建物を守る葺き石の護岸（石敷遺構）である。

当初は前方後円墳の一部とも考えられたが、現在は居館の建物と周囲を区画・防御する護岸の一部と考えられており、護岸の直上や掘立柱建物の柱穴から、土師器高杯・甕・壷などが出土し、5世紀の遺構とみられている。

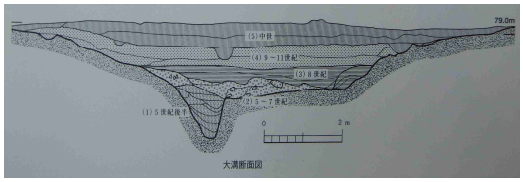


アゼクラ地区の古墳時代中期の掘立柱建物と護岸の石葺き（居館）
天理市教育委員会『布留遺跡範囲確認調査報告書』1979年

杣之内（アゼクラ）地区の豪族居館跡とみられる石敷遺構

杣之内アゼクラ地区の豪族居館とそれに関わる石敷遺構

大溝調査風景



大溝断面図

5世紀の「石上溝」と推定される大溝

また、中央の大溝は幅約15m　深さ約 2m の大規模なもので、布留川から引水するために　5世紀に開削され、『日本書紀』に記された「石上溝」と推定される。

この大溝からは須恵器や土師器など多数の土器とともに、鍛冶関連の遺物や滑石製模造品の祭祀遺物、馬歯、馬骨が出土。

また、6世紀に入ると大溝に接続するみぞ 2 が作られ、この大溝と溝2に挟まれた領域にはこれに並行する方位を持つ建物建てられ、溝2からはさまざまな祭祀関連遺物が出土している。

19 馬歯と下顎骨、肢骨（右の下顎骨と馬歯は大溝出土、左の下顎骨と肢骨は三島（里中）地区流路出土）
5～6世紀　肢骨の長さ約15cm

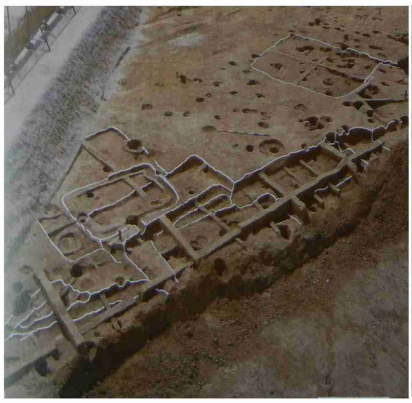
杣之内（樋）ノ下・ドウドウ地区　大溝・溝２ から出土した祭祀関連遺物

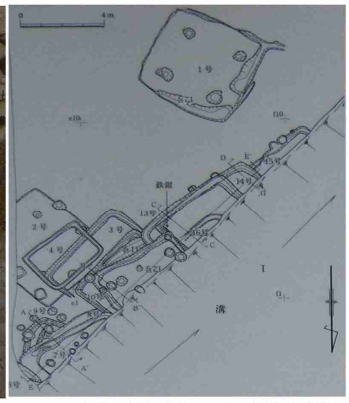
下図は杣之内（樋）ノ下・ドウドウ地区で検出された遺構全体図で、下方が北　上方が南で、 北東から南東方向へ中央部を大溝が走っている。この大溝の両側に大型の掘立柱建物跡群・竪穴住居群跡がでてきた。

布留遺跡布留遺跡杣之内（樋ノ下・ドウドウ）地区遺構平面図
埋蔵文化財天理教調査団『発掘調査20年』 1991

物部氏の中枢　玉作り・鉄器の生産工房群や倉庫群の遺構図

大溝に面した北西部と南東部に多くの掘立柱建物跡や竪穴建物群が見つかったが、その建物跡から鉄鉗や鉄滓、ふいご羽口破片らが出土し、この付近が玉作り、ガラス・鍛冶工房だったことが分かる。特に、この南東部の大溝に近接して16棟もの方形の竪穴住居群がかなり密集して見つかり、ここからは鍛冶や玉作りなどにかかわる遺物が多数出土し、 鍛冶に関係する炉跡は見つかっていないが、ここが物部氏の玉作り・鉄器の生産工房と見られる。





鍛冶・玉工房跡とみられる 杣之内地区の大溝で画された南東部　大溝に接する16棟の方形竪穴建物群

杣之内(樋)ノ下・ﾄﾞｳﾄﾞｳ地区から出土した玉作り・鍛冶関連遺物

また、この地区と布留川を挟んで北側に位置する三島　堂の東・堂の西地区からは　碧玉製の管玉の製作過程中の未完成品が多数出土しているほか、石核や多数の剥片が出土。　また　緑泥石では有孔円板・管玉・白玉の未成品が出土。

鉄鍛冶関係の遺物としては　杣之内(樋)ノ下・ﾄﾞｳﾄﾞｳ地区では上記した鉄鉗ばかりでなく、一部の竪穴住居から鉄滓や鞴羽口が出土　大溝からは鉄滓　そして三島　里中地区の溝や流路跡から鉄滓や鞴羽口が出土している。

28 砥石、鞴羽口、鉄滓　左:杣之内(樋ノ下・ドウドウ)地区、右:三島(里中)地区　5～6世紀　左端の砥石の長さ29.0cm

27 採集された玉未成品と石核、剥片　三島(堂ノ東・堂ノ西)地区　5～6世紀

布留川の北側　三島地区の鍛冶・玉作り生産工房関連出土遺物

これらの玉作り・鍛冶遺物からは　布留川を挟む南北両側の地区で広く鉄器や玉作りの生産工房が営まれていたと考えられる。

(　現在の布留川の北側　三島　里中地区は氾濫した布留川がしばしば流路を変え他地域で、建物跡は出土していないが、多数の多彩な遺物の出土から　活発な人の営みがあったと考えられている。

これら検出された居館にかかわる遺構や大型建物群・玉作りと鉄器の生産工房そして大溝の開削などの多数の遺構と出土遺物をを考えると、この布留川を挟むこの地域が物部氏の本拠地　布留遺跡の中枢部と見られる。

1.4.　物部氏の武具　武器製造を推測させる三島里中地区から出土した大量の把装具類

現在　天理教の大神殿が建つ三島（里中）地区は布留川から分流した流路が何時期にも渡って流を変えて堆積した氾濫原。

このため、古墳時代の**井戸**以外に遺構検出されなかったが、古墳時代前期から後期にいたる多くの流路から　土師器・須恵器・木器などが大量出土し、近辺に活発な生活の場があったと見られている。

特に注目されるのは 5～6 世紀の木製刀剣装具類（把装具・鞘）の出土。 総数61点にものぼる全国一の出土量は物部氏が初期ヤマト王権の軍事部門を握り、大きな勢力を誇っていたことを示す例証だろう。

また、これらの木製刀剣装具類の出土には数多くの未成品も混在しており、また流路からは多量の鉄滓や砥石も出土していることから、刀や剣などの武器類をつくる大掛かりな武器工房がこの近辺に討ったことを推測させるものとして重要である。

布留遺跡　5～6 世紀　三島里中地区出土　左　把装具類　　右　鞘　装具

1.5.　渡来人と工人集団 【1】 韓式系土器などの遺物の出土

布留遺跡からは、5 世紀の韓式系土器など渡来人との関わりを示す遺物が数多く出土し、朝鮮半島の各地から数多くの渡来系集団が布留に来ていたと見られている。

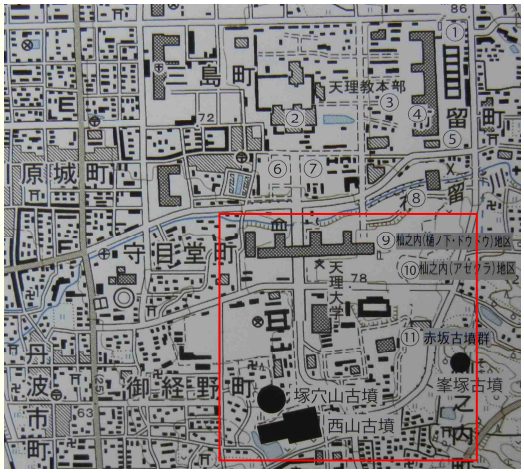
- ○　三島里中地区の包含層から出土した高杯は　脚部に火焔型の透孔のある珍しいもので伽耶地域のものと見られる
- ○　杣之内樋ノ下・ドウドウ地区の土坑から　須恵器の杯・土師器高杯・甕などと共に韓式系軟質土器の格子目タタキメが施された壷・把手付鍋が出土　この鍋の外面には百済との関連が指摘されている長足文と呼ばれるタタキメがある。また　同様の把手付鍋は布留西小路地区の土坑からも出土し、祭祀にかかわるものとみられている。
- ○　杣之内樋ノ下・ドウドウ地区の大溝から韓式の壷が出土　　この壷にも長足文と呼ばれるタタキメがある

多くの韓式土器の出土から、布留の地でも　鍛冶や馬の飼育のほか大溝の掘削などの大土木工事等に伽耶や百済系の渡来人が活躍していたと考えられる。

韓式系土器の地域の特徴が出るタタキ目

1.6.　渡来人と工人集団 【2】 渡来工人の群集墓　赤坂古墳群

布留遺跡　杣之内(樋)ノ下･ﾄﾞｳﾄﾞｳ地区の居館や大型倉庫がある丘陵南側には約 150m の谷をへだてて、長さ 100m 幅 40m 程の独立丘陵があり、この丘に5世紀～7世紀にかけて小規模な20基あまりの古墳が密集して築かれている。



この群集墓の古墳のいくつかの周溝から鞴羽口や鉄塊･鉄滓が出土し、またいくつかの古墳から鉄滓が出土し、古墳の状況から被葬者の階層が集団の中で、決して高くはないとみられることから、これらの古墳の被葬者が鍛冶工人であると見られている。

また、外面に鳥足文のタタキメのある韓式土器が出土した古墳(赤坂14号墳)もあり、この古墳の造営者が百済系の渡来人とみられる。

布留遺跡周辺では5世紀末頃になると赤坂古墳群のように、集落に近接して小規模な群集墓が築かれ始め、6世紀になると東方の山麓に大規模な群集墓が作られ始める。(約150基の古墳群石上･豊田古墳群など)

ここでも鍛冶にかかわる遺物が出土しており、鍛冶にかかわる人々がさまざまな人々がさまざまな形で古墳を造営してゆく姿が見える。

33 鉄鉗, 鉄槌　石上･豊田古墳群ホリノヲ2号墳　6~7世紀
鉄鉗の長さ42.8cm
34 韓式系甕　赤坂14号墳　5~6世紀　口径12.8cm
35 赤坂6号墳出土遺物　6~7世紀　須恵器甕の口径18.3cm
36 赤坂17･18号墳間の周溝出土遺物　6~7世紀　土師器杯の口径11.9cm

本稿「1. 初期大和王権を支えた物部氏の本拠の集落遺跡『布留遺跡』」-布留遺跡から検出された遺構と出土遺物から遺跡の性格を知る- 」は　天理参考館「大布留展」図録の内容・写真を　布留遺跡発掘調査区の位置を明確に意識するため、google　earth 写真を補いつつ、記載されていた発掘調査区・遺構・遺物の内容を　そのまま私の理解に沿って　再整理させていただきました。

また、布留遺跡から出土した遺構外略図は　山内紀氏「ヤマトの開発史　古墳時代の布留遺跡」(2008. 7. 31.) から採らせていただきました。

【整理　base 資料】　天理参考館「大布留展」図録

【図面・写真採取・参考資料】
1. 山内紀氏「ヤマトの開発史　古墳時代の布留遺跡」(2008. 7. 31.)
2. 大阪狭山池博物館　特別展「国土を拓いた金物たち」(2007)
3. 橿原考古学研究所　特別展「三国志の時代　２・３世紀の東アジア」図録 (2012.)
4. 村上恭通「古代国家成立過程と鉄器生産」(2007)

<< 物部氏の根拠地 布留遺跡の性格を知る >>

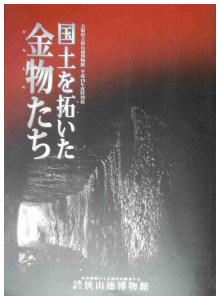
「物部氏 の 根拠地 布留遺跡」 調査区域 と 検出した主要遺構・遺物 まとめ

「大布留遺跡展 」図録より整理

物部氏の大集落遺跡「布留遺跡」調査区域別 主要検出遺構と出土遺物 一覧

① 豊井(宇久保地区) 1984 年調査	埴輪群が発見された布留(アケラ)地点から北東 300m 古墳時代の掘建柱建物・井戸・土器溜まり遺構 と 中世の濠出土 土師器高杯(60 以上)・壺・甕・須恵器甕・滑石製模造品(勾玉・管玉・剣型石製品・有孔円板・白玉)・鉄鎌などミニチュア農工具
② 三島(里中地区)	布留川分流の流路が変わる氾濫原で古墳時代の井戸以外に遺構検出されず 古墳時代の流路から 土師器・須恵器・木器などが大量に出土。 特に 5～6 世紀の木製刀剣装具類(把装具・鞘)が出土 流路からは大量の鉄滓・砥石が出土 付近に大掛かりな武器工房があったと見られる
③ 布留(堂垣内 地区)【1】 1938 年調査	A・B・C3 地点から 祭祀にかかわると考えられる石敷遺構(住居跡を囲むと推定)検出。 この敷石に集中して土器類(土師器甕・壺高杯・小型丸底壺) 出土 A 地点の敷石遺構から滑石製模造品の玉類・櫛出土
④ 布留(アラケ)地区 1995 年調査	1938 年調査された地区から東に約 60m の地点 北西から南東に幅 04～0.7m の石列が約 7m 以上のび、 埴輪がその北側から、破片となって出土。(復元作業で円筒埴輪 10 朝顔形埴輪 15～16 固体 巴形や半円形四角形、三角形などの透孔がある特異な計状。祭祀の場で使われたものが破棄されたと推定されている)
⑤ 布留(堂垣内地区)【2】 1954 年調査	1938 年調査地点より東南 150m 5 世紀の石敷遺構を検出 土器片に混じって剣型石製品・有孔円板・勾玉・管玉・白玉・など数千点に及ぶ滑石製模造品・ガラス製小玉・碧玉製管玉が出土
⑥ 三島 (堂の西地区) ⑦ 三島 (堂の東地区)	5～6 世紀 玉未成品・石核・剥片が出土
⑧ 布留 (西小路地区) 1976～1977 年調査	布留川南岸に位置する地区で 5 世紀を中心とする柱穴・土坑・溝を検出 下記に示す出土品が示す通り 祭祀に関係した遺構が集中している場所とみられる 各種の須恵器や土師器のほか、製塩土器、有孔円板、管玉、臼玉、ガラス玉が出土 土坑(LN22) 内には倒立した土師器甕が置かれ、横から緑泥製の剣形石製品が出土 土坑(LN99) 内部には灰と炭化物が厚く堆積していたが、底や壁に焼けた跡なく、ここからは各種須恵器・土師器のほか 製塩土器・緑泥石製有孔円板・管玉・100 点を超える白玉・ガラス玉・土玉が出土 土坑(LN100) ここからは U 字型鉄製鋤先・土師器杯・高杯・ミニチュア壺などのほか緑泥石製有孔円板が出土
⑨ 杣之内 (樋ノ下・ドウドウ地区) ⑩ 杣之内(アゼクラ地区)	布留川南岸沿いの石神神宮から西 400m 地点が杣之内(アゼクラ)地区 豪族の居館に関わると見られる石敷遺構を検出 さらに北西に 100m の杣之内(樋の下・ドウドウ)地区でも、大型の掘立柱建物跡や大溝が見つかっている。 この溝は『日本書紀』に記された「石上溝」にあたると推測されている。 この大溝からは須恵器や土師器など多数の土器とともに、鍛冶関連の遺物や滑石製模造品の祭祀遺物、馬歯、馬骨が出土。 また、大溝に面した北西部と南東部に多くの掘立柱建物跡や竪穴建物群が見つかった。 その建物跡から鉄鉗や鉄滓、ふいご羽口破片らが出土 この付近が玉作り、ガラス・鍛冶工房だったことが分かる。 これら検出された居館にかかわる遺構や大型建物群遺構そして生産工房遺構そして大溝の開削なとから、この地域が物部氏の本拠地 布留遺跡の中枢部と見られる
⑪ 赤坂古墳群	布留遺跡の豪族居館や大型倉庫のある丘陵の南 150m 谷を隔てた丘陵に 5～7 世紀にかけての小規模な 20 基ほどの古墳群で、鍛冶工人が築いた群集墳 赤坂 17 号・18 号の間の周溝から鞴羽口や鉄塊・鉄滓 赤坂 2 号・4 号・6 号・9 号墳から鉄滓
渡来系遺物の出土	出土また、赤坂 14 号墳穀出土した韓式甕から 被葬者は百済系渡来人と推察されている。 赤坂古墳群のほかにも 布留遺跡からは、5 世紀の韓式系土器など 渡来人との関わりを示す遺物が数多く出土し、数多くの渡来系集団が布留遺跡にいたと見られている。

2.　随分印象が変った私の「布留遺跡」観　大布留展 ＆ 関連講演会に参加して
鍛冶工房だけではない姿が見えてきました



2.1.　抱いてきた布留遺跡のイメージ　「初期大和王権の鉄器生産工房」

狭山博物館　平成１９年特別展「国土を拓いた金物たち」図録より

古墳時代の大和の鉄器工房　特に布留の鍛冶工房群について、その役割を含め、狭山博物館　平成１９年特別展「国土を拓いた金物たち」図録に判りやすくまとめられていましたので、転載させていただきました。

武器・農工具などの実用鉄器などを本格生産して、新しい国づくりを進める初期ヤマト王権の主要鍛冶工房として機能する姿が記されている。一方 今回 大布留展で見た布留の鍛冶工房は弥生時代から続く祭祀に使われる玉作りに連携して働く鍛冶工房の姿が主要と映りました。布留遺跡の鍛冶工房には 弥生時代から続く玉作り工房の工具などの小さな鉄製品を作り続ける姿と新しい時代の要求に対応する大型鉄器作りを 始める姿 の２つの要素がある。

布留遺跡の時代には まだまだ 近畿・ヤマトでは 国づくりの鉄というより 祭祀の鉄のイメージが強いと展示を受け取りました。本当はどうなのでしょうか　古墳時代大和の鉄にいてどう考えるのか また ひとつ面白い疑問と感じています・。

◆　布留遺跡の鍛冶工房の姿《1》　新しい国づくりの鉄

武器を作った証拠?????　布留遺跡で大量に出土する刀装具　《柄・鞘・柄頭など》

初期の鉄器生産

弥生・古墳時代の鉄器は、打ち叩いて整形する鍛冶の技術で作られる。鋳造技術は七世紀まで見られない。しかし弥生時代の鉄器は、中期後半に少しだけ見つかる鉄戈など以外は、簡単な加工がなされただけである。高温を要する鍛接の技術は認められず、鉄板を加熱して叩きのばして曲げる、あるいは切断することが基本だ。

高温で操業する本格的な鍛冶技術の出現は、古墳時代初頭からである。鉄を差し込んだ鍛冶炉に、ふいごで送風して炉内の温度をあげ、鉄に含まれた不純物が垂れ落ちて椀形滓ができる技術、その鉄を何度も叩くことで表面が火の粉になって飛び散り、鍛造剥片や球状滓の生じる技術である。それは福岡県博多遺跡群、奈良県纒向遺跡などで見つかるが、「点と線」の状況で、資料数は少ない。

古墳時代中期、本格化する鉄器生産

五世紀になれば、鍛冶に関連した遺物の見つかる集落が急増し、状況は一変する。そこでは韓半島系土器が見つかることが一般的で、渡来人が住みつき、最新の技術で鉄製品を作ったことを示している。畿内では、奈良県布留遺跡や南郷遺跡群、大阪府大県遺跡や森遺跡では多くの鍛冶関連資料が出土することから、ここは大和王権に鉄製品を供給した専業集落と考えられる。布留遺跡は物部氏、南郷遺跡群は葛城氏、いずれも大豪族に係わる集落だ。布留遺跡の資料で当時の鉄器生産を紹介しよう。

布留遺跡は、布留川が形成した扇状地に立地する、東西約一・五キロメートル、南北約 キロメートルに居住地・祭祀場・生産工房が密集する巨大集落である。首長居館と多数の韓式系土器が見つかる。居館は石垣を巡らせるりっぱなもので、そこに有力者が居たことがわかる。後者は韓半島から持ち込まれた土器、あるいはそれを真似た土器で、渡来人との関連を物語る。有力者は渡来人の保持した最先端の物・技術・情報を得ていたのである。鉄器の他、ガラス・玉・木器などの工房に係わる遺物が出土し、首長居館に付属する工房を含み込んだ集落と言えよう。

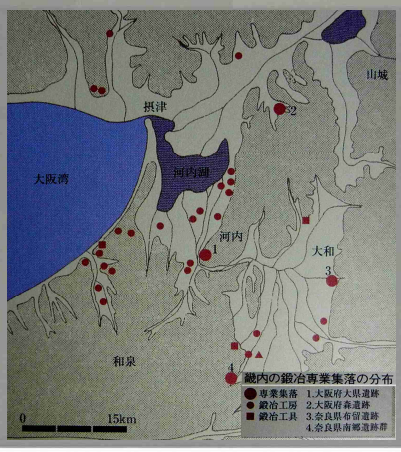
多数のふいご羽口（以下、羽口とのみ記載）と鉄滓が見つかった。鉄は鍛冶炉の中で焼き、叩いて不純物を除去することによって、良質の鉄になる。それには高温が必要で、空気を吹き込む必要がある。ふいごとは、炉内の温度を上げるために空気を吹き込む装置であり、その間をつなぐ送風管が羽口である。

羽口の先端は、炉に差し込んで高温を受けるので、溶けてガラス質になる。椀形滓とは、鉄に含まれた不純物が熱で溶けて滴り落ち、鍛冶炉底の形に固まったものである。

竪穴住居から鉄鉗が見つかった。五世紀以降に見つかる鍛冶具の一種である。焼いた鉄素材を挟む道具で、挟んだ素材を鉄床の上に置き金鎚で叩いて製品に仕上げる。甲冑などを作るには、薄い鉄板に微妙な湾曲をつけるこれらの工具が必要である。この段階に導入された最新の鍛冶技術である高熱に対応する必需品であった。

布留遺跡では、稀なことに刀剣類の柄や鞘が多数見つかった。刀剣の本体は錆びてなくなったかもしれないが、木製の未製品があるので、武器類を作ったことは確かである。

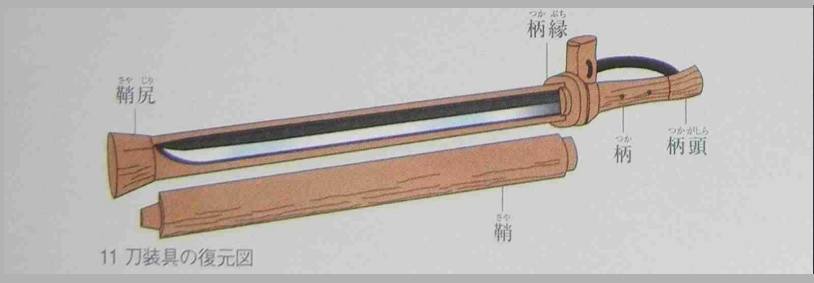
様々な形の柄がある。手を固定するための革帯を着ける孔が開けられており、実用品であることがわかる。後期に見られる金銅装の円頭大刀や頭椎大刀の祖形らしき資料は驚きで、古墳の副葬品を見るようだ。鞘の内面には、刀や剣の形のくり込みが残っている。短剣や短刀のほか、長い刀剣もある。着色しないで白木のままのものもあるが、黒漆や赤漆を塗り、直弧文などの文様を刻んだ柄は、有力者が持ったのだろう。武器を管理した物部氏にかかわる器材と見られる。



9 黒漆と文様(直弧文)で飾った刀剣の柄／長8.4cm／奈良県布留遺跡／5世紀

10 刀剣の鞘／下から2点目長40.9cm／奈良県布留遺跡／5世紀

8 刀剣の柄／中央長13.2cm／奈良県布留遺跡／5世紀



11 刀装具の復元図

7 復元した刀剣の柄／奈良県布留遺跡

武器を作った確かな証拠 ???　布留遺跡で大量に出土する刀装具（柄・鞘・柄頭など）

狭山博物館　平成１９年特別展「国土を拓いた金物たち」図録より

◆　布留遺跡の鍛冶工房の姿《2》

大布留展で知った布留の鍛冶工房の姿　弥生時代から続く　祭祀・玉作りに連動する鍛冶工法か?

玉加工・祭祀関連遺物と一緒に常に出土する布留遺跡の鍛冶関連遺物。

布留遺跡の生産工房群は　玉作りに関係して機能していたのではないか・・・・鉄器製作ばかりでなく　玉作りの側面も

でも　布留の生産工房群は非常に規模が大きく　鉄器生産は本格的

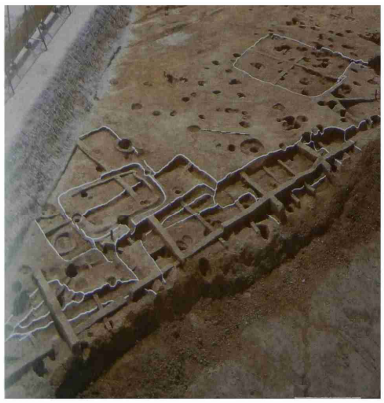
こんな　古墳時代の布留鍛冶工房群の姿は　何を意味しているのか、また　ひとつ新しい疑問です。

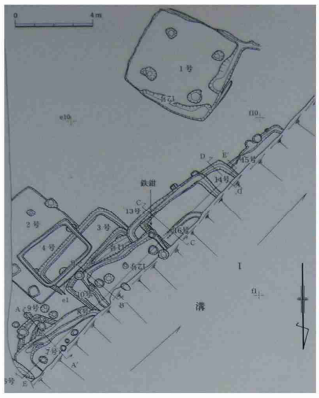
27 採集された玉未成品と石核、剥片　三島(堂ノ東・堂ノ西)地区　5~6世紀

28 羽口、鞴羽口、鉄滓　左:杣之内(樋ノ下・ドウドウ)地区、右:三島(堂中)地区　5~6世紀　左端の羽口の長さ29.0cm

18 三島(堂中)地区出土木製品　5~6世紀　中央一本つくりの肥の長さ14.2cm

玉加工･祭祀関連遺物と一緒に常に出土する布留遺跡の鍛冶遺物　また　刀装具も大量に出土する





鍛冶・玉工房跡とみられる 杣之内地区の大溝で画された南東部　大溝に接する16棟の方形竪穴建物群

布留の生産工房群は非常に規模が大きく　鉄器生産は本格的

「大布留遺跡展　」図録より整理

2.2.　随分印象が変った私の「布留遺跡」観　　大布留展 ＆ 関連講演会に参加して

近畿で鍛冶工房が出現してくるのは　弥生時代後期　丹後の奈具岡・大阪星が丘の鍛冶工房遺跡などで、その後　古墳時代になると　大和に初期ヤマト王権が成立してゆく過程で小規模な鍛冶工房が畿内の各地に生まれ、次には　王権を支える豪族たちが朝鮮半島の渡来鍛冶集団をも取り込んで営む大規模な鍛冶工房群　〈 布留・大県・忍海（脇田・南郷）・森 〉 に集約され、さらに日本で製鉄が始まる前夜には大県に集約されてゆく。

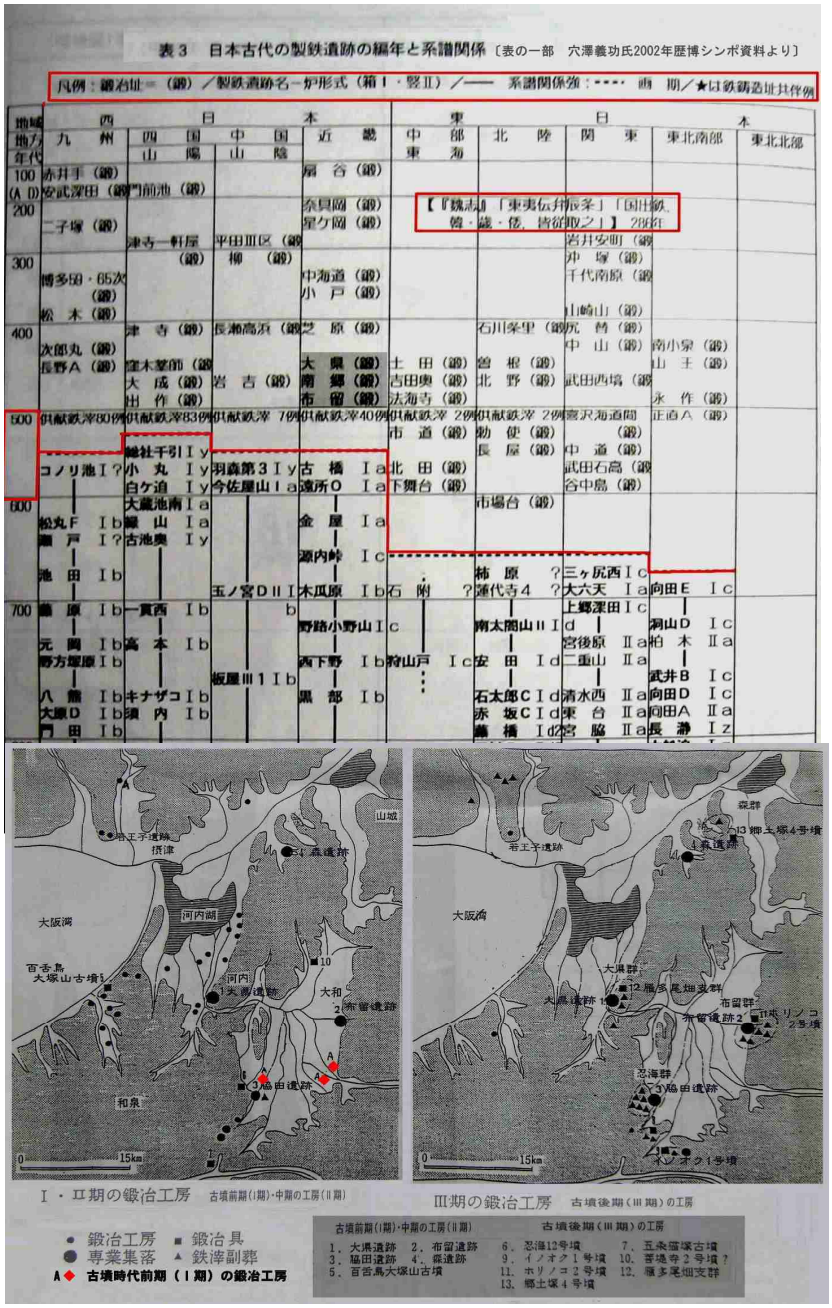
そんな近畿の鍛冶工房出現の歴史の中で 2009 年１月　淡路島で　弥生時代後期の国内最大級の鍛冶工房村五斗長垣内遺跡が見つかった。

　ここでは 23 棟もの鍛冶工房関連建物や数多くの鍛冶炉遺構や家事遺物が見つかり、この遺跡がヤマト王権が成立してゆく過程でどんな役割を演じたのか　興味深々であるが、まだよく判っていない。

弥生時代の鍛冶技術は　まだ、鉄素材を高温に加熱して、素材を鍛造成形する技術はなく、もっぱら　鉄素材を鏨切加工して鉄器を作る技術が主であった。

3 世紀頃　北部九州では鉄素材を高温に加工する技術が伝来し、博多遺跡などでは鍛造加工して鉄器を作る高度な鉄器製造技術があった。

大和の纏向遺跡では　この北部九州の先進技術が伝わっているが、遺跡の出土鉄器を見る限り、製造された鉄器の主はまだ弥生の鏨加工が主で、一部鍛造加工されたものもあるという。

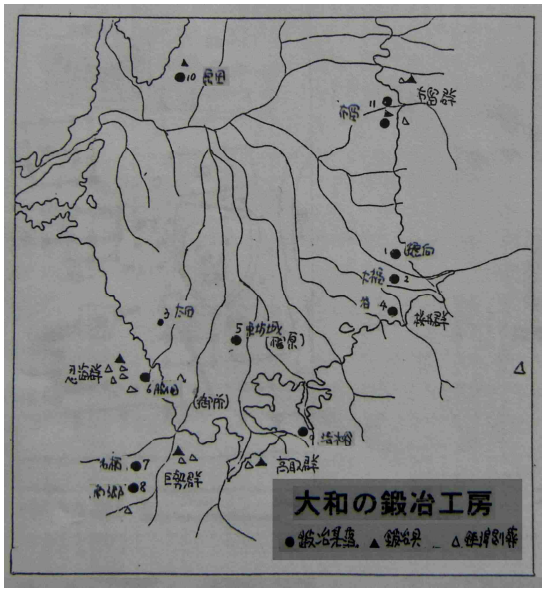


古墳時代の畿内 大和の鍛冶工房の変遷

畿内は鉄器の後進地といわれるのですが、五斗長垣内遺跡の出現　そして纏向遺跡の先進鍛冶技術取込みがその後の大和政権に統一国家成立に大きな影響を与えて行ったであろう。

前置きが長くなりましたが、「大和王権の軍事を担った物部氏の本拠地の鍛冶・鉄器工房が布留遺跡」と捉えて、「どんな新しい技術が初期大和王権の鍛冶工房に入っているのか　それを見たい。　それが大和を国の中心にしていったのではないか?」と。

　でも　今回　布留遺跡について「大布留展」を実際に見て、図録に書かれた遺構・遺物の出土状況　そして講演会聴講で聞いた話しを総合するとどうも、布留遺跡について　思い込みが強すぎたのかなぁ・・・・と。



布留遺跡では 鍛冶工房群と見られる竪穴住居群遺構や鉄滓・鞴羽口や砥石などが出土しているが、残念ながら鍛冶炉や鍛冶工房の内部配置はよく判らず、意外すぎるほど膨らましていたイメージとのギャップが大きいと感じました。。

　　また、鍛冶工房遺構から　鉄の遺物が数多く出ることは少ないと承知はしているのですが、国の軍事を担った集団の中枢鍛冶工房遺跡。そして　弥生から古墳時代の移り変わりに大きな役割を果たしたといわれる「鉄」。
当時　半島から多くの鍛冶集団が日本にわたってきたといわれ、韓式土器など布留の遺物からもそれが見て取れる。
その先進の鍛造鍛冶・そして製鉄へとつながる精錬鍛冶の遺構がひょっとして　見られるのではないか・・　と思っていましたが、どうも違うようだ。

布留遺跡が眠る布留地区を石上神宮李前の岡から眺める

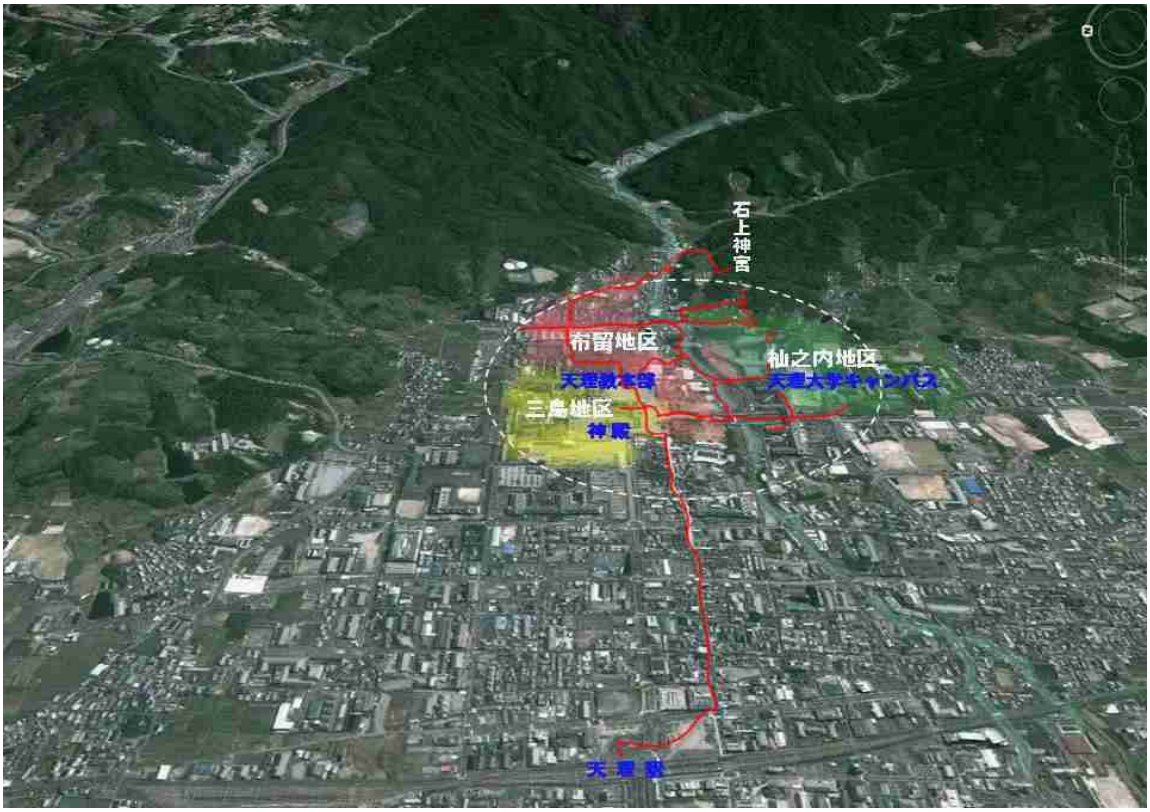
日本各地に興った国々が争った弥生の終末期から古墳時代前期へ
でも「この初期大和王権の時代は　軍事といっても《戦闘》というより、
《祭祀》とのつながりが強いのではないか???」
布留遺跡では　そう思えるほど　祭祀遺構・遺物が数多く出土している。
また、祭祀にも関係すると思われる玉工房と鍛冶との結び月を示す大量の玉遺物が遺跡のあちこちから出土している
日本海沿岸諸国の鍛冶工房そして四国阿波の矢野遺跡など同じく、「玉作りの生産工房の工具作りの鍛冶工房」というのが、この布留の鍛冶工房の性格のように見える。確かに　多数の刀剣装具類が出土しているが、これも鍛冶作業は威信材の装飾副次作業といえなくもない。そう　考えると布留の前の時代　邪馬台国　祭祀をつかさどる卑弥呼の女王国にもつながるのですが・・。どうでしょうか・・・・・
一方　軍事としての武器・武具を頭に置くと鉄族は別にして　イメージ的には　厚い鉄素材を使った鍛造鍛冶が目に浮かぶ。国土開拓の農工具もそうだろう。　北部九州博多遺跡では　いち早く自分たちの技術にした高温加熱加工・鍛造技術を使って、鉄板を重ねて厚手の丈夫な鉄器など　鍛造加工技術がどんどん進んでいったという。
布留遺跡の鍛冶工房の先進性を示すイメージがないのは　大型鉄素材やトピックス的な鉄器遺物が出ていないためか・・・
それとも　そんなニーズは　まだこの時代には必要なかったのかもしれない。
大布留展でも布留遺跡の鉄製品出土遺物をきっちり　見た記憶がなく、インターネットを当たったり記憶をたどったりしているのですが、よく判らない。ひょっとして　鉄族があったかもしれませんが、この時代　まだ　大きな鉄製品が作れる工房は北部九州に限られ、小さな製品は腐食でなくなって出土しないのかもしれません。
布留遺跡の鍛冶工房と玉作りとの関係が頭にあったので　展示されていれば、その工具類を確かめたはずと。
6 月に参加した橿考研での講演会で 布留遺跡の鉄製品として　小さな鑿加工品がいくつか　スライドで映し出されているのを見ましたので、クリヤーではありませんが、布留の鍛冶工房はまだ　弥生時代の鍛冶が主体だと思われます。

ちょっと　鉄器万能論から少し後ろに下がった目でこの古墳時代の大和の鉄器工房群を見ないといけないのかもしれない。
頭は色々揺れ動くのですが、まだ、布留遺跡の未調査部分も多く、布留の氾濫原の広がりを考えるとこれからまだ何が出てくるか　興味深々。大和の古代をひっくり返す遺構・遺物がまだ数多くうまっているかも・・・・・・。
それにしても　天理教の諸施設や天理大学の広大な敷地がそっくりそのまま布留遺跡。やっと布留遺跡の遺構イメージが今回の大布留展参加でわかってきました。　布留遺跡と古墳時代の鍛冶工房のイメージにはまたひとつ不思議が増えましたが・・。
長いことの疑問が吹っ切れた天理参考館での大布留展参加でした。
今まで　布留の鍛冶遺跡はどこだろうかと思いつつも、確かめもせず、石上神宮や山之辺の道を歩いたものですが、
今回はしっかり　これら布留遺跡の色々な遺構が埋まっている場所をじっくり歩いてこようと。

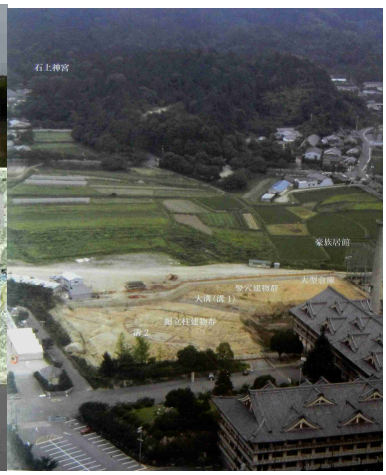
3.　物部氏の本拠　天理市布留遺跡 再訪　再訪 Walk　　2012.5.19.

遺構・遺物の出た場所を意識して　布留遺跡を歩く

天理市布留　　天理教本部　神殿境内から東方 布留の山並みを眺める　　2012.5.19.



南北に細長い奈良盆地の東の縁のほぼ真ん中　布留川のなかれ出る扇状地が天理市布留
すぐ南側の巻向・三輪山を経て　飛鳥へ　古代東西の重要路　山之辺の道が続き、
すぐ北側を名阪道路が東へ山を越えて行く。今も昔も　大和の交通の要衝である
この初期大和王権の北の守りの位置「布留」に　大和王権の軍事を担った物部氏が本拠地を築いた



Google earth の衛星写真で見ると物部氏の本拠地「天理市　布留」は東の山並みの間から西へ流れ出る布留川の扇状地。その出口の山裾から　石上神宮が見下ろす扇状地の中央を布留川が流れくだり、その両側のなだらかな傾斜地に　初期大和王権を支えた物部氏の諸施設が立ち並んでいた。現在はそこがそっくり天理教の本拠地で神殿や天理大学など天理教本部の諸施

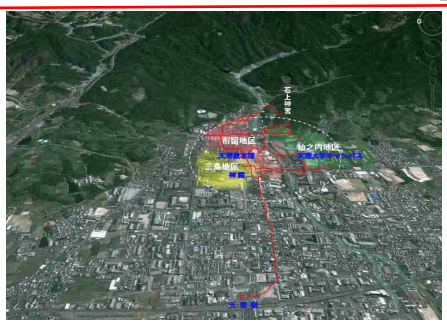
設や関連施設が緑に取り囲まれて建っている。　何度か歩いたことがあるのですが、改めて衛星写真に布留遺跡の位置を重ねると扇状地であることが意識され、大和王権を支えた本拠地となったわけがよく判った。

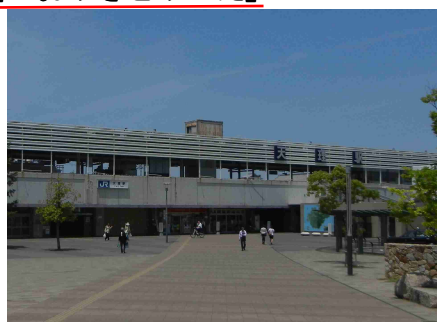
一方　布留川の氾濫に悩まされたことも、「大溝」の開削遺構や居館を取り囲む石敷遺構などに見て取れる。

本などで「布留遺跡」は神殿を中心とした天理教諸施設の下に眠る「大和が日本の中心になる過程のタイムカプセル」やっぱり　直に　どんな場所からの遺構・遺物が出たのかを見たいと気になってきました。

大布留遺跡展と関連講演会参加で、具体的な布留出土の遺構・遺物　そしてそれらが出土した概略場所の地図も頭に入れて、講演会の前後に　各遺構と遺物の出土位置を頭に置きながら　ぶらぶらと天理布留界隈を歩きました。

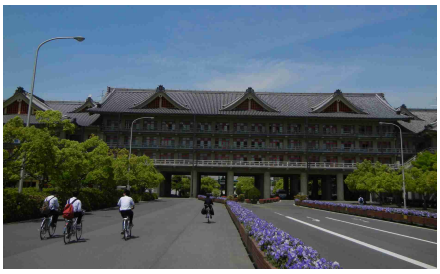
3.1.　宗教都市天理と「おやさと」「おやさとやかた」





天理駅　東側の広場

駅前から神殿へ東へ通じる長い商店街



布留川沿いに建つ　おやさとやかた　南棟　2012.5.19.

5 月 19 日　今回は神戸から近鉄奈良西大寺乗換えで天理駅に降りる。

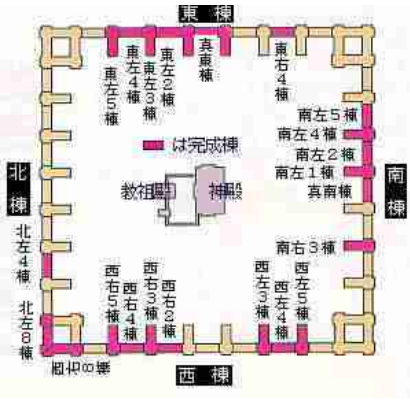
ここには JR 桜井線と近鉄天理線の併設駅で　東に出ると広い駅前広場　ごみひとつない駅前広場であり、東側　山裾までつづくなだらかな傾斜地には天理教関連の建物が立ち並び、天理教の法被を着た全国の信者さんが集まってくる「天理教の宗教都市」。

ここは「おやさと・親里」

駅前から東へ天理教の神殿の横までおよそ 800m の長いアーケード商店街が延びているのですが、日本各地からやってきた人も含め、お互いが挨拶をかわす。やさしさとあたたかさがあふれる商店街である

宗教都市と言っても　天理教神殿はじめ諸施設は　どこも自由に出入りが出来るばかりか、「おやさとやかた」と呼ばれる独特の外観をした4階建てのおきな建物の中央を大きな道路が通り抜け、自由に通行できる。
天理教の法被を着た人を街のあちこちで見かけることを除けば　まったく気を使うこともなく、おおらかで、気持ちのいい街。
自転車に乗って商店街を走り抜ける高校生も実に規則正しく、さわやか
ちょっと　大阪の街では考えられぬ景色である。

天理教の本拠神殿と共に現在の天理の宗教都市のイメージを作っているもうひとつの建物群に「おやさとやかた」と「詰所」がある。
天理の街に入ると 50 を優に超えるでしょうか　同じような外観を持ち、各地の地名が大きくかがけられた天理教信者の宿舎ビル「詰所」が街のあちこちにあり、思わず知った地名を探してしまい、「天理へ来た」と思う景色のひとつです。
そして　もうひとつ　天理教の本拠神殿と共に現在の天理の宗教都市のイメージをつくっている建物群「おやさとやかた」
詰所建物のイメージの原型になった天理教施設独特の千鳥破風の大屋根と統一外観を持つ巨大な横長４階建てのコンクリート建物群がそれである。 駅前から東の山裾への傾斜地を登ってゆくと「あれ　さっき見た建物か???」と錯覚する建物群が神殿の四方を取り囲むように樹木の上に頭を出している景色に出会う。



「おやさとやかた」　http://www.urban.ne.jp/home/katanaka/yakata1.htm　より

布留川沿いに建つ　おやさとやかた　南棟　2012.5.19.

私は良く知らず、軽く「天理教本部の建物だから統一されているのだろう」と思っていたのですが、これらの建物は「おやさとやかた」と呼ばれる建物で、「『屋敷の中は、八町四方となるのやで』」という教祖のお言葉」に基づいて　神殿・ぢばを囲む八町　約９００メートル四方の線上に計画的に建設整備されている建物で、完成した棟には天理大学、天理参考館、よろず相談所いこいの家（病院）、別席場、高知詰所、敷島詰所など　教義の研修、信者修養、病院、教育施設などに使われているという。
建物の外観は全て統一され、千鳥破風の屋根に赤い窓枠、橋の欄干のようなバルコニーの手すり、さらに1階～2階部分は吹き抜けになっていることも多く、生活道路や川の上を建物が跨いでいる事もある。

天理駅の東側　布留川がその中央を流れ下る傾斜地に山際までひろがる布留の街
これらの建物群や神殿など天理教本部の諸建物の建設・整備に伴う発掘調査で、
布留遺跡がベールを脱いだとも言える建物群です。
時間的には前後しますが　天理参考館で開催中の大布留展に行ってで知った遺構・遺物そして出土位置などを一緒に入れて
初期ヤマト王権を支えた物部氏の大集落があった布留界隈　今は天理教神殿などが建ち並ぶその下に眠っている。
以前にも何度か歩きましたが、　新しい知見を頭に入れて　布留の街　再訪 Walk を整理しました。

3.2.　天理教神殿ほか　天理教本部（布留遺跡三島調査地区）から丘の上　布留の十字路へ

前置きが長くなりましたが、駅前から東へ約 800m ほど伸びる長い商店街を抜けると神殿の広場横。ここから東側山裾までの広い地域全体に天理教関連施設がひろがり、その地下に重なって　物部氏の本拠地。

講演会が始まるまでたっぷり時間もあるので、なだらかな傾斜地に広がる界隈を天理教神殿などを見学しながら、扇状地の角　布留の交差点まで上って行って、そこから布留川沿いを大布留展が開催されている天理参考館まで下ることにする。

天理教本部の主要諸施設の地下に重なる布留遺跡

駅前から　東へ伸びるアーケドのある商店街 10 分ほど歩けば、東の山端まで　白砂が敷き詰められ、その中央に神殿が建つ天理教本部の敷地内。　周囲を山の緑に包まれて建つ神殿の正面にでる。神殿は「おぢば・神殿を中心に　四方から囲んで礼拝するように四つの「礼拝場」があり、ここは神殿の南礼拝所の前。南側には　写真でよく目にする大きな門が建つ広い参道がこちらに延びている。この山門のすぐ南下の浅い谷筋を東の山並から流れ出た布留川が西へこの広場沿いを流れ下る。

また、布留川の向こう側の川沿いに沿って天理大学・天理参考館の入っている「おやさとやかた　南棟」が見えている。

この東礼拝所前の正面広場向う右手の山の森の中に石上神宮があり、その山の間からまっすぐ西へ布留川が流れ下る。

ここはその扇状地のちょうどその中心部で、布留川の制御には苦労しただろうが、山並を背に眼下に広がる王城の地をはるか遠くまで見渡せる本拠地に相応しい場所だっただろう。

現在の地名で扇状地の中心部　布留川本流が流れ下る浅い谷筋両岸が布留町　その北側の丘の上が三島町　川の南側が杣之内町で　物部氏の居館や生産工房・倉庫が立ち並ぶ本拠地の中枢部であった。

【 現在は　神殿などの天理教本部の諸施設や広場などがある天理教の聖地「おやさと」　2012.5.19. 】

古墳時代の居館･生産工房･祭祀の場など物部氏の本拠地(1)布留遺跡　三島･布留地区

神殿　手前　西側から　東側　神殿とその奥　白砂の広大な広場・天理教本部の向こうに布留の山並み

南側 神殿の正面

南側　大門

神殿　南礼拝所正面神

殿広場の北東側から　神殿の東礼拝所を眺める

神殿広場の北東側から　神殿の東礼拝所

この神殿のある場所が　布留遺跡　三島（里中）発掘調査地区。

古墳時代　布留川分流の流路が変わる氾濫原で古墳時代の井戸以外に遺構検出されなかったところで、特に 5～6 世紀の木製刀剣装具類（把装具・鞘）が出土。また　流路からは大量の鉄滓・砥石などの鍛冶関連遺物や土師器・須恵器・木器　などが出土した場所で付近に大掛かりな武器工房があったと見られている。

また、南側の門の両側は三島　堂の西・東発掘調査区で　5～6 世紀　玉未成品・石核・剥片が出土した場所で、玉工房とのかかわりが推察される。

ここが扇状地の中心地だったために　主要遺構は出土していないが、その遺物の豊富さから　この地が物部氏の本拠地の中枢部と推察された。
神殿前の広場を山端へ向かって東へ　南北の広い舗装道路を挟んで　南北に長い建物　おやさとやかた東棟の南部分の前に出る。この東棟の南部分周辺が布留遺跡の堂垣内調査地区である。
ここからは　祭祀にかかわると考えられる石敷遺構（住居跡を囲むと推定）が数箇所検出され、その周辺から土器片に混じって、祭祀の遺物（滑石製模造品ガラス製小玉・碧玉製管玉など）　や復元するとそれぞれ 10 固体を超える多数の円筒埴輪や朝顔形埴輪の破片等が出土した場所である。居館周辺で行われた祭祀に使われ、廃棄された遺物であるとみられる。

神殿側から東方向　親里やかた 東棟の東南部と布留の山並

東のおやさとやかた東棟の前の道から　やかたの北東部を東へくぐり抜けると　緑の美しい並木道　布留の丘を南北に走る広い県道 51 号線（天理環状線）豊井町の T 字路に出た。
この道の東側角にも立派な天理教の建物（天理大学の学寮のようだ）が建っている。
このT字路が天理教本部の敷地の北東端。 布留遺跡の北東端　豊井宇久保調査地区であるが、やかたの中を通り抜けたので、遺跡調査地点であるとはきづきませんでした。
この地点は古墳時代　　布留川の山から扇状地への流れ出し部近くで、西へ流れ下った布留川分流の北岸の地であるという。西へ張り出す小さな尾根の上のようで、 県道 51 号線とT字で交わる西への道はなだらかな坂。また、この県道も南に少し行けば、布留川が流れ下る布留の交差点であるが、なだらかな坂が続いているようだ。
この豊井宇久保調査地区からは　古墳時代の掘建柱建物・井戸・土器溜まり遺構　と中世の濠が出土し、土師器高杯（60　以上）・壷・甕・須恵器甕・滑石製模造品（勾玉・管玉・剣型石製品・有孔円板・白玉）・鉄鎌などミニチュア農工具など祭祀に使われたものが遺物として出土している。

東の布留へゆるい坂道　県道51

T 字路に建つ天理教施設

T 字路を西へ下る坂

布留遺跡の北東端周辺にあたる豊井町周辺

この交差点南西隅は布留川分流の北岸に当たり、掘立柱建物遺構や数々の遺物から、ここにも物部氏の居館があったと推定されている。 この豊井地区から南西側三島地区の氾濫原そして布留地区へと続く布留川北岸の傾斜地に物部氏の中枢部　居館・祭祀の場・生産工房などがつらなっていたとイメージされる。

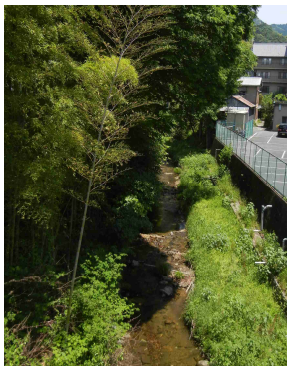
扇状地の中央　神殿の広場から　なだらかな傾斜地を布留川の北側地区を東の山端まで登ってきたことになるのですが、
巨大な建物が立ち並ぶ天理教本部の敷地内を抜けてきたので、のぼりの傾斜地に気づきませんでした。
この交差点のすぐ北側は建物が途切れ、山裾を巻いて道が続いているのが見えたので、今歩いてきた扇状地全体を見たくて　少し北へ寄り道する。天理教本部の敷地の中は直接見られる場所はなかったのですが、なだらかな傾斜地に緑の樹木が広がる果樹園の向こうに神殿はじめ　諸施設の屋根が見え、遠く　葛城・二上の山並が浮かんでいる。やっぱり随分登ってきたようだ。

県道 51 号線　豊井町の少し北側から見る布留川の扇状地の景色　　2012.5.19.
天理教本部の施設の大屋根が木々の間から見え、その向こうに　葛城・二上山　の山並が浮かぶ
ずいぶん高い丘に登っていることに気がつきました

豊井町から県道51号線を南へ　緑に包まれた中に大きな天理教の施設が点在する広い道のなだらかな起伏をいくつか越えると見覚えのある布留の交差点で、谷筋を東奥へ入る道に、石上神宮の案内板が見える。
ここより東の山側は　布留川が流れ下ってくる細い谷筋。
布留川に沿って　谷の奥から布留の古い集落が続いている。
また、すぐ南の橋の下　狭い谷を布留川が西へ流れ下り、谷の向こうの枝尾根の森の中に石上神宮がある。

布留の交差点

3.3.　布留川の扇状地への流れ出口　「布留」交差点　周辺



布留の交差点　　布留の交差点のすぐ南を布留川が流れ下る　2012. 5. 19.

石上神宮まで行くと　講演会に遅れそうなので、 布留川の扇状地への流れ出し口周辺を見てから、 布留の交差点を布留川に沿って下り、 布留遺跡のもうひとつの中枢部が眠る対岸の杣之内地区　天理大学のキャンパスを通って、隣接する天理参考館へ向かうことにする。

布留川にかかる「布留大橋」の横から布留川沿いを東に登って行く坂道を少し登ると　右手に石上神宮への別れ　2012.5.19.

布留川の上流側　　狭い谷の崖の底を流れ、今は水がないが　雨が降ると一気に水位が上がりそうである

布留川と石上神宮の森との間を坂道が奥へ続いている。 振り返ると天理教の施設の屋根が見える高台にいて、布留川はずっと下の谷底を流れている。

布留川は両岸が丘の崖になっている狭い谷を流れくだり、布留の大橋周辺で一気に広いところへ出る。大雨にでもなれば、川幅が狭いので　うまく制御しないと鉄砲水だろう。

　　布留遺跡の辺りが、古墳時代　幾度となく流路をかえる布留川の氾濫原だったのにも納得できる。 物部氏には　鉄の技術・渡来人の技術があったゆえに、この地に本拠を構えることができたとも思えてくる。 この布留川の奥に洪水調節や上水確保のためなど多目的ダムとして「天理ダム」が作られたのもうなづける。

この道をまっすぐ行くと　石上神宮の鳥居の前へ出て、 南へ行けば山之辺の道　そのまま谷筋を溯れば、地図によると北岸を天理ダムへ行く幹線道路に合流できるのですが、午前中に　天理大学キャンパス内の布留遺跡杣之内地区を見ておきたいので、ここで引き返す。 午後　時間があれば、再度もう少し奥まで　布留川を歩いてみたい。

3.4.　布留の十字路から天理大学キャンパス・天理参考館へ　布留川南岸の杣之内地区

物部氏の布留川対岸の本拠地　生産工房や居館が立ち並び、大溝が開削されていた杣之内地区

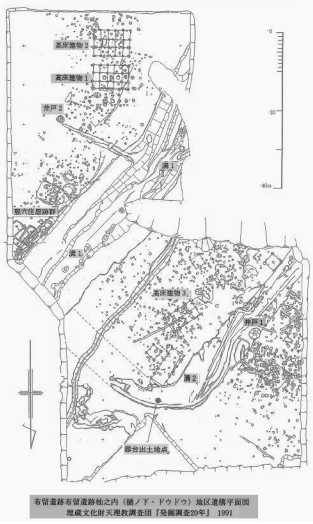
天理大学のキャンパスへの入口　布留川にかかる橋　　おやさとやかた南棟の東半分を大学が使用しているようだ

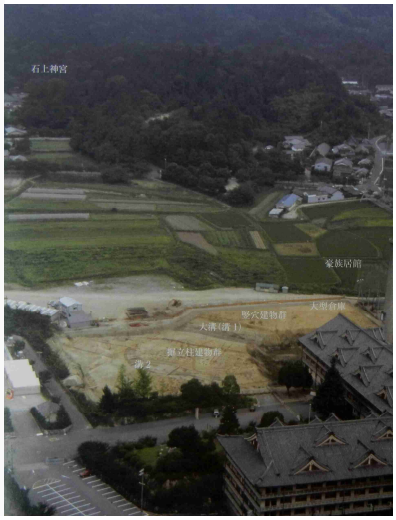
布留の交差点に戻って　布留川の北岸沿いの広い道を西にくだる。
布留の交差点のすぐ下の部分は川と少し離れて川が見えないが、北側が神殿のある天理教諸施設　南側が杣之内地区で、広場を通った時には気がつかなかったが、意外にも布留交差点の下流側も狭い崖状の谷で、思いのほかの傾斜である。
カーブする坂道の向こうに大きなやかたが見え、天理大学の横幕がかけられている。この建物は布留川に沿って建つおやさとやかた南棟で　その東半分を大学が使用しているようだ。道が川に沿うところにこの南棟に行く大きな橋が架かっており、ここが天理大学のキャンパスへの入口。
天理大学のキャンパスへ橋を渡る。
川の東奥正面　大きなやかたの建物の下を川が潜り抜けているのが見える。　このやかたも神殿を中心に「おやさと」を取り囲むやかたのひとつ。遠大な計画が進行していることが実感される。

また　樹木で中が良く見えないが、橋の南東側の川沿いの丘の上のところが、布留 （西小路地区）で、 5 世紀を中心とする柱穴・土坑・溝など祭祀に関係した遺構・遺物が集中して出土したところである。
また、土坑のひとつから土師器杯・高杯・ミニチュア壷や緑泥石製有孔円板などと共に U 字型鉄製鋤先が出土している。
橋を渡ると建物玄関前から東側　建物の端の向こうまで広い駐車場と広場が続き、東の山並まで見えている。
おやさとやかた南棟の建物の東端にあたるこの布留川の川岸からこの広場奥までが、対岸の布留・三島地区にならぶ　もうひとつの物部氏の本拠の中枢部　杣之内調査地区。 建物の端に出るとぱっと　視界が開け、天理大キャンパスの駐車場　広場の向こうに　南北に並ぶ布留の山並が見え、この山並の麓の丘を北から南へ県道51号線。
正面がほぼ布留の交差点あたりで　右手手前の山すその森の中に石上神宮があるが、みんな緑の中に埋まっている。

天理大　杣之内キャンパス　物部の本拠地遺構がうずまる調査区周辺　布留川沿いの駐車広場から　布留の山並を眺める　2012.5.19

この写真に続く右側が　居館・生産工房・祭祀の場などの建物が立ち並ぶ物部氏の本拠のもうひとつの中枢　杣之内調査区。
布留川の流れ出し口　布留にばかりに頭が行っていて、写真には　ちょっと位置が北にずれて　調査区全体は写っていないようだ。
この写真に続く左側の布留の川岸が、先に示した布留 （西小路地区） である。
また、物部氏はこの扇状地を流下る暴れ川　布留川を制御するため、この原に南東側から北西側に流れる大溝を掘り、この大溝の両側に建物を建てて　本拠地を築いたという。





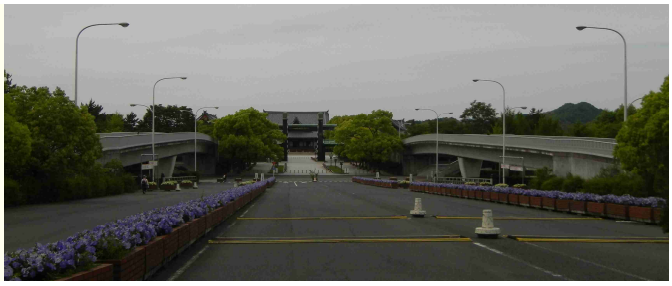
物部氏の中枢　玉作り・鉄器の生産工房群や倉庫群の遺構図

布留川に沿って建てられたおやさとやかた東棟の中を通り抜けさせてもらって、キャンパスの南側にでると　この東棟の建物に平行して　広い大通りがキャンパス内を東の山際まで通っていました。

この道が杣之内地区のメイン路で天理大学のキャンパスの西隣には天理高校や小学校もある。
また、この南棟の西側半分には天理参考館が入っていてその真ん中を貫いて　この道路と交差する形で　大門から天理教神殿　南礼拝所への大通りがありました。

大学のキャンパス内を東西に広い通りが山際までのびていました　2012.5.19.

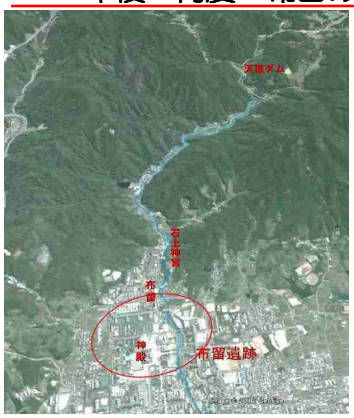
チリひとつなくきれいに整備されたキャンパス内　学生は礼儀正しく、本当に歩いていて気持ちがいい。
ただ難点は　授業のない休・祝日　学食がなくなると　自動販売機以外　まったく喫茶も食堂もないことです。
西へ　少しこの道を下ると　神殿・大門へ通じる大通りとの十字路。
南棟の中を潜り抜ける大通りの西に大布留展の大きな幕が掲げられた天理参考館がありました。
昼食は食いはぐれましたが、時間的にもちょうど良し。
大布留展を見て講演会を聴講。その後で、石上神宮までの walk を再開する予定。



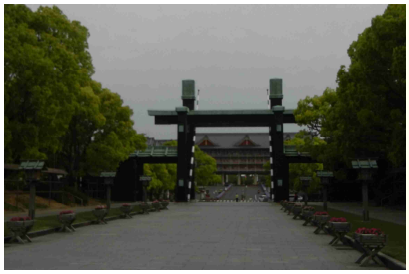
天理大学キャンバス大通りとおやさとやかた東棟の中を突き抜けて　大門・神殿への大通りの十字路周辺　2012.5.19.

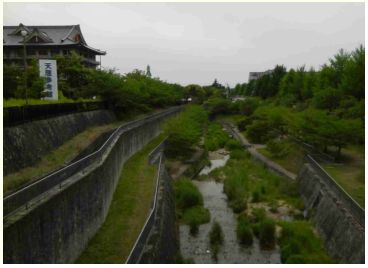
おやさとやかた東棟の西半分が天理大学付属天理参考館　2012.5..19.

3.5.　午後　再度　布留の丘から石上神宮へ



神殿･大門の南にかかる大橋から　東　布留の山並　　2012.5.19.





天理考古館で開催中の大布留展そして講演会を聴講したあと、再度布留川縁の道たどって、布留の丘の上　石上神宮へ。

布留の交差点のすぐ横から石上神宮への道があるのですが、もう一度　杣之内地区を布留の丘から眺めたくて、県道51号線をそのまま500mほど南へ行って、石上神宮の参道から行く。 布留の交差点の南側は田園地　視界が開け、 東側前方すぐ先には　県道脇まで石上神宮のある尾根の森　また、県道の西側には広く田園地帯がひろがり、その向こうには天理大のキャンパスが見える。

石上神宮の尾根が県道にぶつかったところが、石上神宮への参道の入口で、 道の西側に駐車場が整備されていて、ここは杣之内地区を眺める格好の展望台である。

石上神宮参道の入口　　県道をはさんで西側　石上神宮の駐車場

南北に伸びる県道は布留川が作った扇状の傾斜地を横切るので、丘の上から見晴らす形で、天理大キャンパス全体が眺められる。

中央奥遠くに　生駒山のシルエット　　右手緑のベルトが布留川の後ろに神殿　左手には　天理大学おやさとやかた南棟が見えている。

大布留天で買った図録の布留遺跡図を開いて　遺構の位置を確認する。

県道51号脇の石上神宮駐車場から西側　布留遺跡　杣之内地区が眠る天理大学キャンパスの眺め　　2012.5.19.

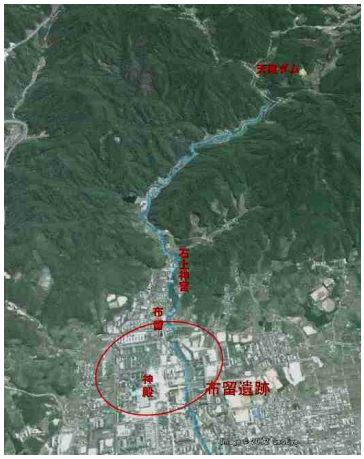
遺跡の東側の高台 石上神宮参道入口より　布留遺跡を眺める 2012.5.19.

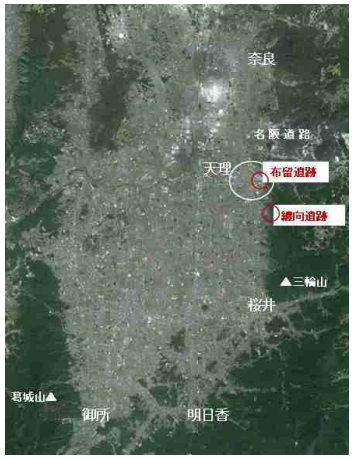
しとしきり、図録と前方に開ける展望を見比べて　今日の布留遺跡の遺構や遺物の出土地を訪ねる Walk のまとめとする。
布留の名前は良く知っていましたが、今回　やっと全体像が判ったような気がしました。
それにしても　物部氏はヤマトの軍事を担ったとの印象ばかりが　頭にあったのですが、祭祀の重要性も見直さねば･･･と。
この初期大和王権といえども　弥生からづく　祭祀が武器のひとつであったのでは･････と思えるほど数多くの遺物が物部の本拠地から出土しているのには　ほんとうにびっくりでした。
　そんなイメージを抱きながら　石上神宮の参詣をして　その奥　　布留の交差点から　川の北側の集落の中を抜け、天理ダムへ向かう県道との合流点へ出て、引き返してきました。 地図で見るとこの合流点周辺が扇状地の頭で、古代には布留川が幾多の氾濫を繰り返し、ここを頭にして　流路が変化して　布留の扇状地が形成されたと思う。

2012.5.19. 夕　　夕暮れの布留の丘を下りながら　Mutsu Nakanishi

石上神宮の境内とその奥　布留の高橋周辺　2012.5.15.

「古墳時代　初期ヤマト王権の軍事を担い　王権を支えた物部氏の本拠地　布留」





【参　考】　〔和鉄の道〕　石上神宮の国宝「七支刀」の復元展にあわせて　物部氏の本拠 地 布留を訪ねる　2006.3.

http://www.infokkkna.com/ironroad/dock/iron/6iron05.pdf

【整理　base 資料】　天理参考館　特別展「大布留展」図録

【図面・写真採取・参考資料】

1. 山内紀氏「ヤマトの開発史　古墳時代の布留遺跡」(2008. 7. 31.)
2. 大阪狭山池博物館　特別展「国土を拓いた金物たち」(2007)
3. 橿原考古学研究所　特別展「三国志の時代　２・３世紀の東アジア」図録（2012. ）
4. 村上恭通「古代国家成立過程と鉄器生産」(2007)
5. 大阪府立弥生博物館　特別展「北陸の玉と鉄」(2005)
6. 国立民俗博物館　第５回歴博国際シンポ「古代」東アジアにおける倭と伽耶の交流」(2002)